

静岡文化芸術大学

第 12 回多文化子ども教育フォーラム

# 定時制高校 について考えよう

## 報告書

日時：2016 年 11 月 12 日（土）

場所：静岡文化芸術大学 南 280 中講義室

主催：静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター

後援：公益財団法人 浜松国際交流協会（HICE）

池上重弘（編集）

2017 年 3 月

このフォーラムは、2016 年度静岡文化芸術大学特別研究（研究代表：池上重弘）

「静岡文化芸術大学を核とした多文化共生の推進策をめぐる研究」及び

「はままつ多文化共生 MONTH」事業の一環として行われました。

# 第12回多文化子ども教育フォーラム 定時制高校について考えよう

## 目次

第一部 報告	・・・ 1
趣旨説明 池上重弘（静岡文化芸術大学教授）	・・・ 1
講演 高橋清樹（NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ）	・・・ 4
調査結果報告 吉田正二（元静岡県立浜松工業高校定時制教諭） 多文化共生時代における教育の課題と提言 一定時制課程における外国籍入学者の日本語能力をとおしてー	・・・ 11
定時制高校出身者の声 ミウラサユリ（静岡文化芸術大学国際文化学科2年） 定時制高校で勉強した私	・・・ 19
第二部 全体討論	・・・ 22
資料	
パワーポイント映写資料	・・・ 35
写真	・・・ 56
アンケート	・・・ 57
チラシ	・・・ 61

## 【1】 趣旨説明 池上重弘（静岡文化芸術大学）

### ○ 多文化子ども教育フォーラム

皆さんおはようございます。本日は朝早くからお集まりいただき、ありがとうございます。これから第12回多文化子ども教育フォーラムを進めてまいります。私はこの会の主催者であります静岡文化芸術大学の池上と申します。よろしくお願いします。本日は定時制高校について考えようというテーマをつけました。

多文化子ども教育フォーラムは、私共の大学が主催して、2011年度から不定期ですが、年にも3回くらい行っております。最初は浜松市内で活動されているNPOの方々、外国人当事者、学校の先生方などが集まって、浜松における教育、外国人の子どもたちをめぐる教育の課題を浮き彫りにして、その構図を捉えて市や教育委員会へ提言する形で、市民の立場からいろんな意見をまとめて提言しました。この提言については私が『国際人流』という雑誌の中で、小文を書かせていただく機会があって紹介しましたが、今年6月にまとまった文部科学省の有識者会議の報告書の中に、私がしゃべった内容を資料として入れてもらいました。浜松発の皆さんの声を文部科学省に届けたということで、ひとつ責任を果たせたのかなと思っています。

その後もいろんなトピックを選んで進めてまいりました。特に本学は主にブラジルにつながる学生がここ数年4、5人入学してきます。そういった学生たちの持っている力を活かした研究やプロジェクトを紹介しながら、2年目3年目とやっております。また外国籍の保護者がどんなことを考えているか、当事者の声をすくい上げて検討する会を2年目3年目でやりました。

### ○ 今年度からは定時制高校に焦点

今年度はこれまでとはターゲットを変えて進めて行きたいということで、今回は定時制高校にターゲットを絞りました。外国人の高校進学は確実に増えていく、ただその高校進学の内容から見ると定時制が多い。また小学校・中学校までの支援に比べると定時制の支援はウンと少ない。この状況について静岡県でも考えていきたいということで、今日は神奈川県から高橋先生をお招きして話を伺います。

それからここ3年程、定時制の生徒たち、保護者の方そして先生方に調査をされた吉田先生から報告書を3月に送っていただいて、是非それも皆さんと共有したいと思って、今日の報告をお願いしました。

定時制出身者ということで本学国際文化科2年生のミウラサユリさんにも話してもらいます。一時期不就学を経験しながら定時制に進み本学に入って今活躍中です。外国籍学生であると同時に定時制出身でもあるミウラさんの当事者の声も踏まえて、後半は全体討論をしていきたいと思っています。

それでは綴じてあるレジメを元にちょっと説明します。

## ○ 外国につながる子どもたちの公立学校における在籍状況と進学の実態

まず文部科学省が2年前、平成26(2014)年度に行った調査について。これは資料がWEB上で公開されているので皆さんもうご存知かも知れません。公立学校に在籍する外国人の児童生徒のうち日本語指導が必要な子が約3万人、小・中・高いずれも増加している。公立学校の外国人児童生徒は約7万3千人ですが、そのうちの40パーセントが日本語指導が必要だということになります。では後の60パーセントは何なのかというと、例えば在日のコリアンの子であるとか、外国籍であるが日本語指導は特に必要とされていないという人たちです。

この統計の取り方についていろいろな問題点があることは皆さんもうご存知だと思いますが、その点は今日は触れません。2012年度の前回調査から約1,700人増加している。言語別ではポルトガル語が約30%、中国語22%、フィリピン語20%、スペイン語10%という事で上位4言語で80%を占めていることが分かります。

一方で日本国籍の児童生徒で日本語指導が必要な生徒も約8千人います。これは例えばお父さんが日本人、お母さんがフィリピン人で、子ども自身は日本国籍けれども、両親が離婚してフィリピン人のお母さんの元で育ったという子どもたちなどがあてはまり、約8,000人います。

浜松市のデータを見てみますと、日本生まれ日本育ちが増えています。2010年4月ではなんと小学校1年生で60%が日本生まれとなってきました。ブラジル、ペルー、ベトナム、こういった国籍で日本生まれが多い。この傾向は浜松に限らず、静岡県西部地域、あるいは全国的にと言った方がいいかも知れません。フィリピン人の増加が非常に顕著です。浜松でもブラジルの53%に次いで、フィリピンが13%と増えています。

高校進学率は浜松では8割台になっていますが、定時制が多いです。2014年度末、高校進学率は81%、このうち公立全日制は35%、定時制は30%、私立14%となっています。ちなみに2015年度の学校基本調査では、全国を見ると全日制98%、定時制2%ですから、この定時制30%という比率が非常に高い比率であることがお分かりいただけるかなと思います。

こちらは外国人集住都市会議が2012年度にまとめたデータです。長野・岐阜・愛知ブロックで教育をテーマに取り上げました。この時私は長野・岐阜・愛知ブロックのアドバイザーを務めていましたので、その調査のプロセスにも少なからず関わったわけです。これを見てみると、高校へ進学した子どもたち約830人のうち半分くらいは通常の授業についていける。一方で読み書きに課題がある子は26%、学習用語や表現が難しい子は17%、逆にいうと半分くらいがなかなか日本語の能力面で問題を抱えているということです。830人のうち全日制進学者の530人にしぼってみても、34%が何らかの日本語の課題を抱えている。定時制進学者220人についてみると、課題を抱えている割合が66%、3分の2に増えています。つまり全体で見ると半分が課題を抱えているという状況なのですが、全日目にしぼっても3分の1、定時制進学者については3分の2が日本語の理解能力に課題があるという状況がここでうきばりになっています。

## ○ ブラジルにつながる子どもたちの学力差の拡大モデル

さらに私の十数年の調査経験から作ったモデルですけれど、ブラジルからやって来た第一世代の人たちに関していうと、ある程度社会の下位層だったものが今、第二世代、つまり移住して来た人たちの子どもたちになると、上の方もうんと伸びるが下の方も落ち込んでいる。こんなモデルが書けるかなと思います。

上の方は大学に進学して語学力や文化適応能力を活かして大企業の総合職として活躍するグローバル人材です。例えば 10 年前には、私たちの大学に複数名のブラジル人の学生たちがいて、静岡県を代表する企業の総合職として就職するなんてことは全く想像できませんでした。私自身そんな未来がくるなんて考えていなかった。ところが今や卒業生たちは大企業の総合職として活躍しています。

日本語がある程度できて、日本の高校や専門学校を卒業して比較的安定した職場で働く労働者層も、今少し増えてきているのかなと思います。一方で比率的に言うところポリュームゾーンなのかなと思いますが、日本語が中途半端で親世代の出稼ぎスタイルが抜け出せない、間接雇用の工場労働者が今大半なのかなと思います。さらに日本語はおろかポルトガル語も中途半端で、一方で日本での生活に慣れて親世代が従事していた重労働に耐えられず、バイトなどでつないでいる、ちょっと言葉はきついですけど底辺層に落ち込む人たちも実は出てきています。二極化ではないですけど上限と下限の差が広がっている状況があると思います。

## ○ 高校進学と高校での学びに焦点を当てて

高校進学が 10 年前だと大きな課題になったのですが、今は高校進学者自体の比率は先ほど言いましたように 8 割くらいになった。けれども進学はしたものの、このモデルで言うところ、この半分から上の方に行ける子はなかなか多くない。これを放置していると、例えば後 10 年後、20 年後に、今ヨーロッパで生じているような状況が日本でも現出しかねない。そこで、私たちは高校進学および高校での学びに焦点をあてて、日本の社会で生きて行く力を付けてもらうにはどうすればいいだろうかというところに、今年度以降はシフトしていきたいと考えています。

というわけで、今日は神奈川県の高校現場で教鞭をとられている一方で、NPO の活動もされていて、高校進学あるいは高校での学びについては日本の第一人者である高橋清樹先生をお招きしています。高橋先生と私が最初お会いしたのは東京学芸大学のシンポジウムでした。その後、最初にちょっとお話をした文部科学省の有識者会議でもご一緒させていただいて、今日ここにお越しいただきました。それでは高橋清樹先生をお招きしたいと思います。拍手でお迎えください。

## 【2】 講演 高橋清樹（NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ）

### ○ 自己紹介

皆さまこんにちは。過分な紹介をいただいたのですが、私は22年くらいたつのですけれども、高校現場で外国から来た子どもたちの支援活動をしなけいけいなということで、活動先行型なのです。今年NPO法人に関わっているのですが、今は大学に落ち着いたかもしれないですけど、当初は私が突っ走っていて周りが止めるみたいな感じで活動してきた、活動先行型の人間です。しかも研究者ではないのです。まとまったご報告ができるかどうか分からないのですが、私は今、神奈川県立橋本高校で、ここは外国人特別募集で神奈川県には今年度は10校、来年度から13校在県外国人特別募集という形で3年以内の外国籍の生徒さんを受け入れるという学校の1つで、毎年15名受け入れています。そこの一応再任用なので週に3回しか学校に行っていないのですが、在県を担当しています。それから22年くらいになりますけれど、NPO法人に関わっております。

今回定時制高校のテーマで実はお話をさせていただくのは、私自身も初めてなのです。一度定時制高校全国教頭会で話をさせていただいたことがあるのですが、その時はどちらかというと外国につながる生徒の進学の話だったのですが、今定時制高校の中でどういう支援をしたらいいかというのが私自身にとっても非常に大きな課題ですし、これから大きなテーマというか課題になると思っています。

### ○ 定時制高校支援のきっかけ

2年前から神奈川県で定時制高校で支援を始めましたけれども、そのきっかけというのがやはり外国につながる子がどんどん定時制高校に入って、でも辞める率も高くて、入った方がいいが辞める、卒業したのはいいがちゃんと職に就けないみたいなことがあって、やっぱり支援者の方からなんとかしなければいけないという声がものすごく上がってきまして、私どもの方もこれはなんとかしなければいけないということで、たまたま2年前に神奈川県がやっている、教育委員会と協働して取り組む事業、というか、行政と一緒に取り組む事業を提案して採択されるとお金が付いて5年間実施できるという枠組みがあって、それで実施をしたという経緯があります。

### ○ 定時制高校とは

定時制高校はどういうイメージかというと、これは実際に行って見ないと分からないことが沢山あるのですが、多分昔のイメージで考えると、働く人が行く高校である、昼間働いて勉強している、ちょっと荒れているかなというイメージがあったり、年上の人も多い、男子でやんちゃ系が多いのではないかな、なんか想像の域を出ないのですが、昔だとこんなイメージがもしかしたらあったかも知れないと思います。しかし、今はガラッと変わって、働くための高校になっているかというところ、そこに疑問符がどうしても付いてしまう。元々自分は働くことができるかなと不安に思っている子が多いということなのです。働くことを最初から目的にして定時制高校に入っているわけではなくて、働きた

い、いや働けないかな、という感じのイメージで定時制高校へ行く子たちが多いのではないかな。

それから多様な課題を抱えている子たちが多い。年齢が上の人は意外と少ないです。年齢が高い方もいますけれど全体的にはそんなにいない。今は女子も結構多いですね。定時制を断固受け入れないというお国柄の方もいらっしゃるんですけど、とにかく見に来て下さいと言うと、女子は結構安心するというケースもあります。

多様な課題のところですけど、本当に多様でして、ほとんどの生徒がこのどれか1つに該当するのではないかと思います。不登校経験がある、家庭状況がなかなか厳しい、ひとり親家庭であったり、生活保護だったり、保護者が深夜労働をしていたりで子どもとすれ違いになる状況があったり、本当にそういった意味になると状況は厳しい。発達課題があると一定程度的手帳を持っていたり、コミュニケーションが苦手だったり、こだわりが強かったり、自由にする傾向があったり、結構それなりに課題はある。それから学習が苦手である。これは小学校・中学校あたりから苦手意識を持ったまま学校に来ている。

最近 LGBT という形の、いわゆる性的マイノリティの方が一定いるんですけども、なかなか表面化しないんですね。どうして定時制高校を選んだかという、まず女の子はスカートをはかなくてもいいとか、制服がないとか、修学旅行がないとか、修学旅行に行かなくても大丈夫とか、そういう選択で定時制に行く子たちも結構多いです。

## ○ 外国につながる生徒たち

それから外国に繋がりがある生徒も一定程度という状況になっていると思います。これは私が神奈川県でまとめたもので、もしかしたらこちらの静岡県とはちょっと状況が違うかも知れませんが。これは神奈川県の国際教室を卒業した生徒の調査なのですが、教育委員会と協働でしているので 100%の回答率です。今年の3月に卒業した生徒の数をグラフにしました。左側が国際教室に在籍している生徒数、母数が 326 人、右側が県内全体の数字になりますけれども、これは見ていただくと分かるのですが、やはり定時制が多く、定時制高校に進学している割合が 25.8%という割合になっています。

そのうち、神奈川県は来日 3 年以内の在県外国人特別募集枠があって、定時制にも 1 校枠があるので定時制の枠に入った子も 5 人いますけれども、それは昼間定時制で、それに入った子が 5 人います。やはり右側の一般の約 3%と比較すると非常に高い数字であると思います。

## ○ 定時制高校の抱える課題

定時制高校が抱えた課題というところでいくつかありますけれども、まずは中退者の高さというのが神奈川の場合高い状況にあります。これは昨年度の中退者の数ですが、全日制高校は 1%弱なのに対して、定時制は 10.7%と 10 倍以上になっています。10.7%というのは 100 人に 10 人くらい辞めているのかなという感覚かも知れませんが、実は 4 年間になると 40%辞めていくことになるんですね。これの次の数字なんですけれど、卒業に至る生徒の割合は、なんと 57%なんですね。だから 10%は 1 年生でドカッと減っていますね。1 年で減り 2 年で比較的戻していますけれども、3 年から 4 年に行くとドッと減

っているという特徴的です。ただ3年で卒業する定時生徒が今結構広がってきているので、ちょっと最後の3、4のところは割り切らなくてははいけないですけど、最終的に卒業するのが1,823人という事で、最初に3,200人以上定時制に入っているのに卒業する割合が57%という状況で、10%という数字だけ見ると10分の1かなという感じなんですけれど、実は4年間過ぎて非常に中退率が高い状況になっています。

## ○ 卒業後の進路

卒業後の進路についてみると、昨年度の神奈川県公立定時制高校の卒業生1,823人の内訳ですけども、大学とか専門学校へ進学する子もいます。外国につながる子もけっこう大学に進学しています。最初高校に入った当時は日本語はできないことはありましたが、能力の高い子は日本語の問題をクリアして結構定時制でも大学へ進学するケースがあります。逆にいうと定時制の星のようにすごく頑張っているというケースもあります。

2年3年くらい前は就職者は25%より少し上くらいだったのですが、こここのところ就職率はちょっと上がっています。37%になっていますが、まだまだ低い数字だと思います。定時制高校の支援の有り方というところが1番私たちも悩んだところで、どういう支援がもっとも相応しいのかなというところなんですけれども、1つは私どもの団体は外国とつながる子どもたちを中心に支援してきたのですけれども、定時制高校で支援するという時に、外国につながる子だけ支援するという考え方は持たない方がいいだろうと思っています。もちろん個別に日本語が必要な生徒には日本語指導をしたりというサポートもありますが、基本的にやはり定時制高校で私たちはキャリア支援をするという時に、基本的な課題が、かなりいろんな共通する課題があるので、外国につながる子だけ取り出してキャリアの支援をするのはあまりなじまないかなと思っています。

## ○ 定時制高校での支援の在り方

そこで私たちは等しく定時制の生徒を全体に対してキャリアの支援をしようということで支援が始まりました。考え方としては、まずは中退率が考えられますけれど、やはり学校が楽しい居場所でない、なかなか中退率を減らすことはできない。そこで楽しい場所になること、社会参加の気持ちを育てることを考えました。

定時制の生徒に聞くと、皆そういう子ではないですけど、中にはやはり自分が社会に出れるのかとか、極端な場合、自分は役に立つ人間なのかというところまで思い悩んでいる子もいたりして、社会参加をする気持ちを育てるには時間がすごくかかりますけれども、やっぱり土台作りから始める必要があるのかなと思いました。

それからキャリア支援ですが、よくキャリア支援、キャリア支援と簡単にいうのですが、どうしても今まで日本のキャリア支援は、働く側ではなくて、受け手側、企業側、受け入れ側の考え方で、支援を学校側に持ち込んでいるという感じがすごく私はするので、だからあなたはこういう形で身に付ければ、ちゃんと就職できますよとか、こういう仕事ができるようになりますよとか、結局会社側がどういう人間を求めているかという枠に合わせようとするような形になってしまいます。私はその結果として、今の日本にはブラックな会社が増えてきたのではないかなという気がするのです。本来は自分を守ることを



考えたり、自分が役に立つということを考えたり、自分の力をどう発揮するかと自分の主体で考えることが大切です。当然そんなに甘くないといわれればそれまで、会社の方と協議しなければいけないのですが、やはり自分を守るためのキャリア支援という観点でもっと前面に押し出してもいいかなと思うのです。

企業によっては、留学生がよく入っている企業でカルビーという企業がありますが、カルビーは積極的に外国の留学生とか、外国から来た人たちを受け入れて、管理職自ら職場改革をしよう、外国から来た人たちの目線で企業に居心地良くしようと取り組んでいると聞いたことがあるのですけれども、まさにそういう観点も必要かなと思っています。

その中でいろいろ考え出したのは、昨年度から私たちが始めている定時制高校とのキャリア支援という事業になりますけれども、特徴としては先ほど申しあげましたように、私どものNPOと県の教育委員会が協働でやるという枠組みで実施をしています。去年は5校だったのですが、今年は定時制7校で実施をしています。神奈川県は、全体で二十数校なのですから、だいたい3分の1弱くらいで支援しています。

支援内容はやはり学校の環境とか在籍している生徒とか先生方の考え方とか、いろんなことを協議しながら、本当に学校ごとに様々です。予算は神奈川県の助成金なので学校側に負担をしてもらうという形ではないので、学校側も非常に受け入れやすいという形を取っています。

## ○ 校内カフェ

具体的に何をやっているかという、実は校内カフェというのをやっているのです。これを話すとびっくりされる方がいるのですが、えっ校内でカフェをやっているの。実はこれ、校内カフェは大阪が発祥なのです。大阪の淀川高校で、校内でカフェをやって、それが神奈川県でも田奈高校でカフェが始まって、私たちはこれを定時制に持ち込もうということで提案し、校内カフェをいくつかの学校でやっています。

たとえば、A高校では校内カフェという形で、こんな感じです。ちょうどこれは広いオープンスペースがあって、そこに丸いテーブルがあって、カウンターに飲み物とかお菓子とか用意しておきます。ここは昼間定時制があるところです。午前の定時制もありますから、午前の授業が終わった人たちが来るとか、昼間の定時制の子が早く来るとか、夜の定時制の子が早く来るとか、いろいろ三々五々生徒がいっぱい集まって来て、そこで飲み物とかお菓子を提供すると、先生方によっては、飲み物やお菓子を提供して何するのみたいなイメージを多分持たれている方も、最初はなんとなくいらっしゃったのですけれど、これはやはり、そこに寄って場として生徒同士が交流します。この辺に居る子は横浜市大の大学院生が間に入って、一緒に話をしたり、向こうの方にいるのは、上智大学の学生さんだったり、ちょっと見えませんが、神奈川県の県立保健福祉大学の看護学部の学生さん、将来保健室の先生になることを目指している学生さんが来たりしていますが、何気なくそんな看板は背負わないです。大学生、スタッフですから、全くそういう看板を背負わずに、飲み物とかお菓子をサービスして、そこで自然に中に入って話をするわけですね。

そうすると最初は本当に高校生同士でいろいろ話をする、それから大学生が入って話をするのですけれど、日常的な話からだんだんいろんな話が出てきて、実は家庭の話が出る

のです。家庭の話が出る時はその高校生は、多分その場ではなく、1人で来て大学生にちょっと聞いてと言って話をするのです。やはり家の中で親とうまくいってないとか、生活保護を受けているけれど働けないと聞いたけどどうしたらいいのとか、働く和生活保護費が減るからどうしたらいいのかなとか、本当にだんだんそういう相談が個々に出てくる。

そうすると一応学校側と協議して別の部屋を設けて、そこで相談しようかということで話をします。実はこの中に専門家がいます。今立っている男性、彼はよこはまユースという若者の支援組織のスタッフなのです。その子は、もちろんそういう看板は背負ってないですけど、そうやって自然に間に入る。それから臨床心理士の人も実は入っているのです。うちのNPOのスタッフも入っていますから、もし解決したい相談があったら我々の守備範囲内、ちょっと心理的なサポートが必要だったら、メンタルクリニックというところから一緒に協働でやっているスタッフがいますから、入るとか、就労関係だとよこはまユースが入る。外部支援組織と一緒に入ることで、自然に子どもたちをそういう外部組織を意識したり、そこに繋がっていくみたいな事を意識してカフェをやっているのです。だからそういうきっかけ作りみたいな事が私たちの目的なのです。

## ○ グループワーク授業

他にはB高校でグループワークをしています。これは体育館で大学生がずらっと並んで自己紹介しているところですけども、1年生対象のワークショップのグループワークで、大学生は十何人ときています。やっぱり1番左にいる女性がユースポート横浜という若者のサポートステーションの中にある若者サポートステーションのスタッフの方なのです。あとは大学生で、これからコミュニケーションゲームをやりますが、各グループに入ってテーマを決めて、例えば先日やったのは、ドラエモンの過去未来というワークショップをやりました。ドラエモンの過去未来のマシンがあったら、自分は過去に戻りたいのか未来に行きたいのかという時に、やっぱりだんだん話していると自分の過去、特に自分が生きていた過去からそれより前の過去とは全然違うのですけれども、自分が生きていた過去に戻って、自分の過去をもう1回やり直したいということをポロッという子がいたり、もう過去は見たくない自分の将来を見たいとか、全く自分が生きていない世界の先を見たいとか、いろいろ語ってくれるのです。大学生は傾聴という研修プログラムを受けて、とにかく大学生は高校生の話を聞こうということでこのグループワークをしています。

## ○ ワークショップ

これはC高校ですけど、学校側との協議で1年間こんな形で今年はやりましょうということを提案したものです。ですからここは、総合学科なので、産業社会と人間という授業がありまして、その授業支援をやっています。職業選びとか、自己分析とか、進路選択とか、そういったテーマの授業を大学生と一緒に入ってサポートするみたいな形を取りつつ、最終的にワークショップに入っていました。

最初はコミュニケーションゲームからスタートするのですが、9月にはブラックバイト。寸劇を私たちがやってその寸劇にあるいろんなブラックな店長と新人の大学生バイトがやり取りする中で、どういうことが問題なのか深く考えさせるような取り組みをしています。

それからアサーションは2年生ですが、断れない、断るというところに相手との気持ちを考えて、断る伝達法を身につけようみたいなことで、アサーションというプログラムも入れています。

## ○ 学習カフェ

D高校では、これも昼間定時制なのですけれども、学習支援をしています。ここはやはりフィリピンルーツの子たちが多く、中国の子たちも多いのですけれども、日本語教育をしている大学の学生さんが来てサポートしたり、学習のサポートということで、そこは分け隔てなくしてやるような形で、1つの教室を借りてやっています。今これでいうと、慶応大学の学生さんが入っていますけれども、毎週金曜日に4時半くらいから8時くらいまで場所を借りて、来て一緒に勉強するようなことを実施しています。

こういったいろいろな学区、学校ごとに様々な支援を必要があるのですが、最終的にはそこから私たちにとって見ると人間関係を少し広げて豊かにし、自分自身が学校の中でいろいろ悩みを伝えると、もちろん学校の先生方に伝えることは当然あるんですけど、やっぱりいろんな人が周囲にいることによって、いろんなつながりの中で話ができて、それは学校連携の中で学校の先生方に報告して共有するという形を取っています。

そういう中で最終的には若者サポートステーションなり就労支援組織がキャッチして、それが学校の中で相談をするのです。最終的には、もしかすると中退したらこのサポートの人に来てもらって相談をしなければならないとか、卒業した後もうまく就職につながらなかった場合は継続して相談するみたいな形を目標にしています。

たとえば相談の事例から、卒業したら働かなければいけないので、在学中から少し貯めておいた方がいいかも知れないということで、本音は働きたくないというのがその子どもの気持ちです。18歳で高校へ再入学した、で、やはり働く上での不安はコミュニケーションと仕事を覚えられるか。こういうような不安があって、そこを相談しながら、最終的にアルバイトに向けて求人を見たりして、コミュニケーションの練習とか、サポートステーションにこういうコミュニケーションの練習プログラムを持っていたり、インターシップのプログラムを持っていたりしますから、そのところをうまく組み合わせをして参加し、最終的には支援に繋がったという事例なのです。ここまですごく時間はかかりますけれども、学校だけではなかなか継続的な支援ははっきり言って難しいと思うのです。

特に学校は高校卒業したらどこまで関われるかということも、はっきり言って見えないところがありますから、きちんと高校生が卒業した後はここに来れば、また何か、例えば1回就職したけれども辞めざるを得なくて、じゃあどうしようかと言った時に、こういう場所があるという事を是非高校生に知ってもらうという意味で、つなげるということをやっています。学校から外部の指導機関へつなげることが1つのステップで、最終的には就労へという流れを1つの事例として挙げさせていただきました。

## ○ キャリア支援の目指すもの

私たちが目指すものは、定時制高校の生徒は、いろんな意味で就労になかなか結び付きにくい、または就職した後も実は離職率が3割とかとされています。非常に離職率が高

い、それから離職した後に実はなかなか再就職がしづらいという報告が、研究成果として出てきています。

なぜかという、やはり離職した原因が、もしかすると自分なのではないかと思ってしまうがちだそうなのです。結局職場でいろいろ働きながら失敗したりして、自分は駄目だとか言われたりする中で、自分が本当に働いてちゃんとやっていけるかどうかという不安の中で辞めてしまうところから、なかなか立ち直れなくて再就職に結びつかないというケースが結構多いというところがある。

ところがサポートステーションの方がおっしゃるには、今 20 代だったら、まず再就職はほとんど可能だとおっしゃっています。そこが現実と個人が思っている感覚と実際世の中では違うところがあるかなと思います。ここ定時制の生徒の中にはやはりフリーター、バイトでいいと思う子たちが結構多いのですけども、バイトでいいということを、それじゃあだめよというのではなくて、取りあえずはバイトでいいけど、そのままずっとはどうなのというところの切り口で、やはり少しバイトをしてお金を貯めて、次に何かしたいという子がいますね。例えば大学へ行きたいとか。ですからバイトをして経験をつないで、何か次に自分のやりたい仕事をしたいとか、そういうふうに少し考え方を広げるというようなこともサポステと一緒に相談の中で入れるようにしているのです。

そういう意味でいうと、私たちは定時制とそういった社会支援組織とどういうふうにプラットフォーム化する、つなげていくかということが、これから非常に求められている支援のあり方の 1 つかなと思っています。そう言った意味で、ひとつ神奈川の取り組みがうまくいって、全国に広がると嬉しいなと思っています。

これが最後です。川崎の定時制高校なのですが、慶応の学生さんが集まって、左下のところは、高校生が書いたカフェ、プラットカフェという名前なのですが、夏休み中お休みだったので夏休み前に、次は 9 月 2 日だよと絵を書いてくれていますということで出しました。

川崎はご案内のように事件があって、加害者の子が、さっきの定時制を中退した子なのです。やはり学校側もそういった意味では定時制の中でそういった支援が必要だということで受け入れてくれてやっているという状況があります。そういう中で子どもたちがカフェという居場所でどんな表情をしているかということ、ここがさっきの川崎です。みんな集まって、たまたま真ん中のコーディネーターの方が JICA でエジプトに行くことになってお別れ会を皆でやったのです。そしたら思い思いのメッセージを出してくれました。定時制の子たちは本当に人懐こくて、こういうことに関してはすごく気持ちが温かいところを持っています。

これはさっきのカフェですね。これはワークショップの授業ですけど、最後はこれから大学生が入ると真中にいるのが大学生ですけど、なかなかワークショップやっても参加しない子が必ずいるのです。体育館の壁の方においてスマホをいじっている、そういう子がいるのですけれど、この大学生が入ってすぐ集まって来て、先生方は、あっ、こんな表情見たことないよというような感じで言ってくれたので、写真だけご紹介します。私のこういった取り組みは神奈川でも始まったばかりですけども、何か参考にさせていただければありがたいです。ありがとうございました。

### 【3】 調査結果報告 吉田正二（元静岡県立浜松工業高校定時制教諭）

#### 多文化共生時代における教育の課題と提言

#### 一定時制課程における外国籍入学者の日本語能力をととして－

##### ○ 自己紹介

皆さんおはようございます。浜松工業高校の吉田と申します。これからお話ししますのは、「多文化共生時代における教育の課題と提言、定時制課程における外国籍入学者の日本語能力を通して」という事で、研究を進めた調査結果の報告になります。この研究は静岡市にあります公益財団法人はごろも教育研究奨励会から3年間に渡り、助成を受けて研究をやったものです。研究については報告書を毎年、年度末に提出するのですが、大体3000字程度です。それを提出してその年の6月に印刷されます。3年目の内容についても今年の6月に印刷されて報告書が出ております。報告書自体が文字ばかりなので、今回このような機会を頂きましたのでに生徒・保護者・教員に対してのアンケート調査結果を図表などを交えながら話させていただきたいと思います。

資料の方は全てを出すのは印刷が大変かと思って幾つかは省略してあります。

##### ○ 県下定時制高校在学の外国籍生徒

まず、定時制の事について少し話をしておかなければいけないと思います。定時制は静岡県下で21校だと思うのですが、大体定員が200人から240人のマンモス校以外は定員が40人です。その中で工業高校は東部、中部、西部と3校あります。そのうちの1つが浜松工業高校になります。教員の配置は、浜松工業高校が1番優遇されているかも知れませんが、養護教諭を含めて16人です。通常は1クラス40人、4学年4クラスだと教員数は8人くらいだと思うのですが、普通科のみの高校では教頭先生も入れてその程度で、工業高校でも十数名です。それにも関わらず浜松工業高校では16人いたというのは、「建築専攻」があったからです。高校生を卒業した社会人が建築について学ぶ訳ですが、そこにはやはり教員を配置しなければならないので、4人建築科の先生がいました。私もその1人です。ですから通常よりも教員数が多いという事です。そういう事も知っておいていただきたいと思います。

浜松工業高校ですが、私がいた時には定員40人をいつも満たしておりました。教員も多い事から2クラスで運用して、1年2年3年については2クラス20人ずつみて、4年で1クラスに合体させていました。1年から2年の時に中退者が多く出ますので、3年になった時には、在籍者数は大体平均で25人くらいです。30人以上というのは私が最初に勤めた24年の時くらいです。私が静岡に来たのは平成13年です。6年間静岡工業に務めた時には外国籍の生徒は0人でした。平成19年から天竜林業高校に勤めた訳ですが、1年の担任をした時に1人だけブラジル出身の子がいました。ところがその子は2年目に退学してブラジルに帰りました。ちょうどその時がリーマンショックだったのです。保護者は職がないという事で一家で帰る事になりました。天竜林業にいたその生徒はポルトガル語ができ日本語もでき、成績もは上位でした。ポルトガル語が使えた事

で問題もなく帰国できたという事が言えます。その後に浜松工業高校に平成24年に転任したのですが、最初に3年2組の担任をさせていただいた時に、そこでは珍しく両方合わせて30人進級していました。私のクラスは15人でそのうちの5人が外国籍でした。1組と合わせても30人の内8人が外国籍でした。その次の年に1年生の担任をした時は、全体で40人ですけれども、私のクラスは20人の内5人が外国籍の生徒でした。

このような背景もあって少し外国籍の人の為に何ができるのかを考えようと思って、この研究がスタートした訳です。初めに静岡県定の定時制高校の外国籍の生徒を見ておきたいと思います。教育委員会が平成26年5月時点でまとめた時には262人の生徒がおりました。21校のうち19校の定時制に外国籍の生徒がいるという事で、アンケート項目を作ってそれを配って回収したのが229人分です。その間に十数名が退学したという報告も受けています。全員がアンケートに答えてくれた訳ではありませんけれども、大体89パーセント回収できました。その時に西部はブラジル人が115人いまして、西部地区に労働者として集中する保護者がいる為にこういう数字があるというのも見て取れると思います。

## ○ 研究目的

ここで研究目的です。外国にルーツを持つ高校入学者・あるいは在籍生徒の日本語能力に注目して、この研究を進めようとした訳です。単年度でやろうと思ったのですが、校長先生から、「そんなの1年間でできないだろう」という事で、3年間でやる事になりました。

1年目は現状把握として生徒と保護者へのアンケート調査です。このアンケート調査をするにあたっては、関係各者に当たって、いろいろな機関にも訪問して、どういう質問項目にすればいいかという事を相談して決めて行きました。1年目は現状把握に努めたという事です。2年目については生徒の家庭環境とか保護者の教育観を、保護者へのアンケート調査をもとに実際にお会いする事によってインタビュー調査を行いました。同時に保護者がどういう教育をやっているのか、またそれに対する生徒の学力がどんなものなのか、というのが分からないことには先に進まないものですから、学力調査というのもしました。3年目は1年目2年目にやった内容のまとめという事で、課題と提言という事になります。

## ○ 募集動向の概略史

さて、浜松工業高校定時制ですが、スライドには募集動向の概略史という事で書いてあります。浜工自体は大正4年全日制が開校しているのですが、昨年100周年記念式典が行われました。定時制については昭和23年に開校しております。その時は3クラス120人です。その後4クラスの時もあるのですが、昭和63年に外国籍生徒が入学しております。ベトナム人1人です。これも詳細は明らかではありません。一応卒業生名簿を全部紐解いたのですが、昭和60年以降に定時制で勤務している先生が再任用でおりましたので、その先生方に聞いたら63年ではないかという事なのです。もし日本語で書かれている名簿でしたら、もしかするとブラジルの方でも日本語表記のた

めに、外国籍と記録されないかも知れません。とりあえず記録として最初にでてきたのは63年でした。

それ以降平成2年、出入国管理及び難民認定法の改正があって、いろいろ入って来る訳ですけども、募集定員についてはだんだん少なくなってきて、現在では1クラス40人という事になっています。平成18年から募集定員が40人になりましたので、その生徒数の変化をグラフにしたものです。平成19年から1年生が左から赤いマークですけど、段々増えて来て平成24年には12人が入学しています。42人中12人が外国籍です。その生徒が2年になって3年になって4年になったという話で若干数字が合わないというのは退学という事実がそこにはあります。24年以降を見ますとトータルで1年2年3年4年を合わせますと大体20パーセントから25パーセント、全校生徒の25パーセントが外国籍生徒なのです。これまでは南米系が多かったのですが、最近は東南アジア系の生徒も多くなっておりまして、多国籍化が進行しているという事です。

## ○ 定時制課程在籍の生徒の国籍

その後平成25年にこの研究が進んで、いろんな準備をした段階で10月にアンケート調査をいよいよスタートする事になったのですが、その時の在籍生徒の数字22人は、ブラジル人15人、ペルー人4人、ベトナム人2人、フィリピン人1人ですね。生徒に対しては日本語の質問用紙を準備し、保護者に対してはそれぞれ翻訳したものを配布して調べました。

アンケートの結果です。生徒の約60パーセントが日本生まれの日本育ちという事になります。ここで注目しておきたいのが、在日年齢1歳と4歳はともかく、7歳、8歳、そして13歳で日本に来了という事です。この事について記憶に留めておいていただきたいと思います。いじめについてのアンケート調査も行いました。定時制では被害経験者数が5人、29パーセント程あります。理由は言葉、肌の色という事です。比較の為に浜工の全日制でもやりました。浜工の全日制は1000人以上の規模なのですが、そこに12人の外国籍の生徒が在籍しています。もう1つ比較の為にA高校の定時制87人にも調査し、結果が出ています。

## ○ いじめ被害経験

この調査から言える事は、いじめ経験というのは最低でも30パーセント以上はいるという事です。中学から上がって来る資料には当然、この子は外国籍だと書いてあれば外国籍としてカウントする訳ですけども、中には内緒にしている生徒がいて分からない事もあります。ですからそれらを含めると人数が若干増えるかも知れません。例えば長いカタカナの表記があれば、すぐに外国人だと分かる訳ですけども、漢字で分からない場合もあります。はっきりさせない理由の1つは先ほど見たいじめ問題があるからです。いじめ被害経験者というのは自分が外国人である事を悟られてはいけない、だから隠すのです。そういう場合もあって数値に出て来ないという事があります。ただそうしますと高校になってこれからいよいよ自分の文化というものは何なの、母国の人としてのアイデンティ

ティは何なのか、というのをどう保持して行くかという問題が生じてくる事になると思います。

ここで異文化教育について考えたいと思います。私は元々建築なのでこういう感じの内容自体はあまり詳しくないものですから皆さんにとっては今更ですが、ちょっとお聞きください。

異文化適応という内容ですけれども、これは異文化接触の過程で問題になるものですから、文化的同化と文化的変容に分ける事ができるという事です。その中で特に文化的変容が問題になるという訳です。外国人の生徒というのは基本的には文化間を移動する訳ですから最低でも2つの文化に接触してその併存する状況が日々の生活の中で受け入れられている併存状況にあるという事です。これは、ベリーという学者が文化変容のというのを接触、葛藤、危機、適応という段階で捉えている事を示した表です。そして最終段階の適応という時に文化的アイデンティティとか、文化的特性を保持する事に価値をおくかどうか、あるいは異文化的集団との関係に価値をおくかどうかという事で、2つの基準の組み合わせによってどのタイプに類型化できるという訳です。ここでは統合、離脱、同化、境界化という言葉で表している。

## ○ 自分自身を日本人と比較した時の意識

それでは22人の生徒に自分自身を日本人と比較した時の意識を聞いてみました。日本人的である、母国の人間である、両国の感覚を持つ人間である、特に意識していない、こういう項目を出してみますと両国の感覚を持つ人間が10人と一番多く、45パーセントを占めています。これは相手によって使い分けるとというのが彼らの意見ですけれども、特に意識していないというのが8人もいます。実際にインタビューしてみると、日本で生活している以上自分が外国人である事を意識する事はしない、無意識にしておかないといけないという様にしているというのです。8人が全部そうではないですけれども、これは明らかにいじめ被害経験者のコメントです。

次のアンケートです。保護者の方を見て行きたいと思いますけれども、保護者については18家族32人を対象にしています。1990年から1992年まで3年間に集中して19人が来日しています。入管法改正と日本経済の好景気による人手不足の中で来日しているというのが分かると思います。現在の仕事の雇用形態ですけれども、一番下からいくと正社員6人、パート・アルバイト9人、これは直接雇用です。派遣11人と、こういう風になっています。ただ直接雇用の方が間接雇用より多い訳ですけど、正社員は6名と21パーセント程度です。こういう仕事の雇用はどういう風にして探したかという、就業方法ですけれども、基本的には同じ国籍の知人を通して探している場合が9人いて、家族とか親戚に多く頼っている人が4人、ハローワークとか新聞、求人雑誌等を見た人が合わせて6人くらいという状況です。

インタビュー調査をやっていくと在日時点では当然正社員はいません。出稼ぎ者全員が変則の労働時間に身をおいていたという事です。短時間でお金を稼いで貯まれば国へ帰るという目的を達成しようとした訳です。それを達成する為には当然夫婦一緒に共働きの方がいいという事で、そっちの方も多かった様です。現在もその状況は変わらないというの



が続いています。1日の労働時間を見ましても8時間、10時間と、全体の50パーセントをしめている訳ですけれども、朝からずっと夜中まで働いている保護者も6名程います。これは技能労働と一般作業員で全体の21人をしめている訳ですが、全体的に安い賃金で働かざるを得なかった状況にあったという事は言えると思います。

それでは近隣の日本人とどういう風にして付き合っていたかという事を見ていきたいのですけれども、親しくつき合っているというのは僅か4人です。基本的に挨拶程度は、25人という圧倒的な数ですけれども、全くないという人も3名ほどいます。その理由として言葉が通じない、話すきっかけがわからない、日本文化・習慣がわからないということを挙げています。

### ○ 保護者自身の日本語能力

言葉の問題があるかも知れませんが、保護者自身が自分の日本語能力をどういう風にして理解しているかです。ほぼ完全にできる、わりとできる、まあできる、あまりできない、できない、という感じで分けたのですけれども、日本語での会話については、ほぼ完全にできる、わりとできるが大体5割くらいを占めています。ひらがな、カタカナの読みはほぼできる、わりとできるで6割です。漢字の読みについては、まあまあできるまでを入れても10パーセントを超える程度しかありません。

### ○ 保護者が見た子どもの日本語能力

保護者が自分の日本語能力をこのように評価していながら、子供についてはどんな風に感じているか、どう思っているかです。これを見ると、ほぼ完全にできる、わりとできる、まあまあできるというのです。あまりできない、できないというのは無いのです。子供が喋れているのを見ると保護者は全てができると思っている。保護者自体は子供の日本語能力を過大評価していると言えます。基本的にこのまま普通に喋って、友達が来て友達と喋っているという事自体はカミズの言葉を訳した学者の言葉を使えば、社会生活言語と言えますが、社会生活言語については十分能力があると思っていて、当然それイコール学習思考言語能力があると勘違いしている、誤解しているという事だと思います。

保護者がこうして子供の日本語能力を見ている訳ですが、実際その生徒がどれだけ学力があるかどうかというのを、客観的に見れるようなものが必要になります。24年、3年の担任の時に外国籍生徒に対して、授業の始まりの30分前に来て漢字をやらせました。すると日本語は喋れるのですけれども漢字は書けない、算数ができるのかなと思って算数の問題をやらせたのですが、どうもできないということがわかりました。1年悩んだ後にこの研究が始まった訳ですが、その時に全国学力調査で静岡県が余り良くなかったというのがあって、その問題を使わせてもらおうと考えました。27年の小学校6学年の国語A問題と算数A問題を使って調べました。

外国籍生徒だけを選んでやるのではなくて、全校生徒全員120人くらいいましたが、120人に問題を使って40分でやる訳ですけれども、ここに出してあるのは、国語、英語、問1と問2の漢字の読み書き、算数に至っては1番の問題で四則計算を挙げています。

## ○ 日本在住期間と学力状況

この学力調査でやったものと22人の生徒の日本在住期間との関係を示したものがこの表になります。引用させていただきたいのはスクトナブ・カンガスが母語の定義というのをやっているのですが、彼が4つ定義を出していた2つを使って見たいと思います。一つは、最初に学んだ言語と言っていますがそれを「出自」と言います。2つ目は人が最もよく知っている言語、これを「運用能力」と言っています。ですからこの2つ、出自と運用能力を使って話をしたいと思います。

本校の生徒の場合運用能力として、日本語を母語とする日本生まれ・日本育ち、それが13人、出自とする場合が9人です。その内容を学力状況から分類していくと、それも国語を中心とし、算数は入れずに見ると4集団に分けられるのです。運用能力面では国語正答率4割以上がAグループ、3割以下のBグループ、出自の面では7歳までに来日したCグループと8歳以後に来日したDグループの4つです。正答率が低いDグループですが、算数の問題を見ると、5人の内4人、5分の4については、文章問題は別として、数字が出ていれば問題に「次の計算をやりなさい」と書いてある意味がわからなくとも、なんとなく計算をやりなさいというのが分かるので、計算のやりかただけ分かれば答えは出るという事です。おそらく別の問題も、もしポルトガル語で書いてあればおそらくその子たちは数学についてはもっとできるのではないかという事は予想されます。

学習環境が保持できなかったBグループですが、これは日常生活の中で保護者が忙しいという事で交流時間が少なかった、あるいは両親が共働きで、就業時間が変速で顔を合わせる事がなかった、という理由がインタビューをやっていると分かります。

ここからは私の個人的な考えもあるのですが、文化的な価値観というものに注目すると、日本文化を基盤とした教育のあり方を幼児期から接してきた生徒に対して、保護者というのは基本的には労働者として来日している訳ですから、文化的背景は当然おのずと異なるはずで、これが教育に対する考え方にも影響しているのは当然でしょう。しかしその背景には保護者がおかれた労働環境を無視して考える事はできません。入管法改正によって日系人労働者に対する需要の増大があったとき、これはラテンアメリカ諸国では、生活水準が著しく低下する時期と一致します。そうするとそれまで中産階級を経験してきた保護者は出自に従って向かう先は日本になるという訳です。つまり日本の労働市場の要請に応じて日本にやって来るという訳ですね。多くの保護者が大学卒業者でありながら、コミュニケーション上の困難や、労働内容により日本語を使わなくてもいいとか、高学歴ではあってもしゃべらなくてもいいような単純労働を探してそれを仕事としてやっていくと事になった訳です。そうするとそういう環境の中で保護者自体が如何にして日本の文化に馴染んでいくか、日本の文化に適応しなければいけないという事ですから、自分の子供がやっている事を考える余裕がなかったと思われます。BとDのグループについては学習に対する心の準備というものが十分にできていない事もあってストレスを抱えているケースが、学力に大きな影響を与えたと考えられます。

生徒の学習思考言語としての日本語能力についてももう少し考えてみたいと思います。親の教育戦略については必ずある訳ですが、それは経済状態に左右されるかも知れません。子供が来日した時が学齢期前、あるいは日本生まれ、日本育ちだったら、日本語はで

きるため学校生活に不自由はしない訳です。この場合には課題として母語が保持できるかどうか、というのがあります。勿論ここではこの生徒は日本語ができる訳ですから、日本語能力は問題視しない。ところが外国籍であるという事は無視される。日本でいうところの脱文化化がここではかられていると言えるでしょう。

逆に学齢期以降の来日者については、母語は当然中途半端、日本語も中途半端、つまりダブルリミテッドになってくると。先程の8歳・13歳で来た生徒がいますけれど、7歳の生徒、これは例外ですけれども、そういうダブルリミテッドの子ができてくるという訳ですね。そうすると保護者が、先ほども見た様に、子供の日本語能力を過大評価している訳ですけれども、実際子供としては抽象的な概念や論理的思考が母語により訓練できていない上に日本語でも分からないものですから、心的ストレスを抱える原因にもなっています。

ここで大阪大学の志水先生が、フランスの社会学者ブルデューという人の研究を引用して、学力に影響を及ぼす家庭的要素を3つ挙げていることにふれたいと思います。経済資本、文化資本、社会関係資本というものです。今回の調査自体が十分な分析資料を持っている訳ではないのですが、外国籍生徒を対象にしたアンケートとか学力調査で、明らかになった内容は、実はこの3つの資本の指摘に合致しているという事です。経済資本は親がお金があればという事です。文化資本は教養があればという話。社会関係資本は、例えば経済資本や文化資本が保護者になく貧しくても、大学卒ではなくても、社会関係資本が充実していると学力は維持されるという訳です。ですから学校と家庭と地域社会につながる力が社会関係資本である訳ですから、それが改善される事で生徒の学力は保障されるという事です。

## ○ 支援体制づくり1 教員の意識改革

この事を踏まえて最後に多文化共生時代における教育を外国籍生徒支援プログラムとして提言したいと思って報告書の最後にまとめました。ただその前に教員の意識についても触れておきたいと思います。こんな時代だからこういうアンケートを取る意味はあるのかどうか迷いました。いろいろなアンケートをやっていると、「こんなことを質問するな、常識ではないか」という事を、時々答えとは全く関係のない事を私自身書く事があるのですが、そんな回答も期待してはいました。

外国籍生徒が20パーセントから25パーセント以上いる訳ですから、こういう機会に従事している先生方、ここに書いてある33というのがこの数字ですが、これらの先生方に対して調査を行いました。「外国籍生徒を意識した授業をやっていますか」と聞いたら「やっている」と答えたのが18人、「やっていません」が13人でした。18人がどんな事をやっているかという、基本的に単純な事で言えば、ルビをふってあげる、ひらがなにしておく。社会なんかだと日本のところを教えていてもブラジルの生徒は全然分からないから地図とかで指してあげるとか。人の顔が分からなければ写真を入れてあげるとか、意識をしてやっているようです。しかし13人については全然関係ないという事です。学びを保障するかしないかという話になってくる訳ですけれども、学びを保障しているという事ですから、ここで言えるのは学びを保障して意識をしていれば、生徒の個性とか将

来を尊重しているのではないかと思います。これはあくまでも私の教員の意識というアンケートの中で作ったものですので、あまり結果を出したくなかったのですけれども、こういう現状があるという事を知っていただきたい為に出しました。

外国籍生徒を無視しつつ学びを保障したいというのは、おそらくこの子は日本で頑張るのだから、日本での将来を尊重していると思うのです。ところが、13人の外国籍生徒を無視したという人たちに、あなた方は学びを保障したいと思いますか、保障する気がありますか、という質問をしたところ、「そんなの質問するな」という答えを期待していたのですけれど、なんと8人がその気がないを書いてあったのです。エッと思ってしまったところなのです。この8人のうち4人は定年前の人と再任用の人です。インタビューすると先がないからいいのではないかとやっているのです。あとの4人は新規に採用されたばかりの2人と講師です。これから採用試験を受けて教員になろうという人たちなのです。4人もいます。県教委はそういう人たちも採用している訳です。こんな事でいいのだろうかと思わざるを得なくなっちゃってちょっとショックでした。

最後にまとめたいと思いますけれども、支援体制作りという事で3つ挙げました。心のケアとか子供の支援ネットワーク作りとか、この辺が主体になっているのですけれども、第1に教員の意識改革です。毎日外国人に接しながら何にも考えていないのです。22人と言っても4学年あって、1年2年3年が2クラスで、合計7クラスですが、先生が教えている時に1人いるかどうかという話になってくると、当然1人ができなくてもあまり気にしていないというところがあります。それはそれで仕方ないかも知れませんが、やっぱり外国籍の生徒を入学させているという事に責任が必要ではないかなと思います。教育研修というのを取り上げてみたいという事で書きました。学習指導です。先ほど小学校6年生の問題を使って実際に全校生徒にやらせて見たのですけれど、なんという事はない、定時制の他の生徒も学力は当然低いです。今回は多文化共生という事で外国籍生徒に絞っていますが、外国籍生徒の方が数学はできていたとか、国語もできていたというののもいっぱいあります。それでも学習指導という事をやるためには、教科担任とか外国語教員とか、こういう人たちが校内で体制を整えて学習指導して、必要な時には情報を学内で共有する事が必要ではないかと考えました。

## ○ 支援体制づくり2 心のケア

次に心のケアです。基本的には不安とかストレスを解消してあげなければならない。それに対しては母語を活かした活動の場が必要なのではないかなと思います。母語なのですが、母語を通してアイデンティティが形成されていくというのは明らかで、小学校、中学校時代で自分を出せなかった生徒が高校で自由に出せるという機会も多くなっています。だったら将来日本に永住、帰化するという意思が有る無しに関わらず、もし学びたいというのであれば母語指導もする必要があるのではないかと思います。

## ○ 支援体制づくり3 支援ネットワーク作り

それから子供をつなぐ支援ネットワーク作りです。基本的にはNPOとの連携です。義務教育段階でいろいろとNPOとかの関係機関がやっていますから、それを小学校・

中学校で終わらせるのではなくて、高校までつなぐ事業へと展開する必要があるのではないかと考えました。勿論学習支援の方もそうですが学習思考能力が不足している訳ですから、大学生ボランティアなどの協力を得て、学習支援をする事によって学力を少しでも伸ばしてあげることが必要だと考えております。

これからの支援体制作りとして最後に報告書としてまとめたものなのですが、残念ながらこの研究に関わった人は全て今年の3月に転勤しました。校長先生、教頭先生、そして私を含めた教員3人が関わったのですが、全て転勤したのです。今後どうするかという事になる訳ですが、転勤する前に基本的には外国籍生徒の学力を伸ばすという事は、イコール学力の低い日本人生徒にも有効だということで、教育課程の大幅に入れ替えを3年間でやる事にしました。教頭先生、校長の理解を得、変更して今1年目ですが、2年3年後に完成することになっています。それと同時に外国籍の日本語能力がない為に、そのプログラムを関係機関と協力して作ろうという事で話が進んでいます。これはTOCの内山さんの協力を得て進んでいる事業です。

教員の人数としては他の定時制よりも沢山いる浜工定時制なのですが、生徒の将来を見越した、あるいは将来の生徒を育てようという意識が教員にあるかどうかは疑問符が残るところなのです。定時制を去って行った者としては、とりあえず意識改革がどの様に進んでいるのか、あるいはどの様に学力を保障する取り組みが進められているのかというのは今後も見守って行くしかないのかなというところなのです。

ご清聴ありがとうございました。

**池上** それではもう1人今日はプレゼンターがいます。本人が不就学を経験しながら、浜松市内の定時制高校に通って、そして本学に入学をして来た学生です。さらに今度は大学生として定時制の子供たちをエンパワーする活動にも関わっています。そういう若者が今この町に出てきているのです。とても誇らしいことだと思います。それではミウラサユリさんをご紹介します。拍手でお迎え下さい。

#### 【4】 定時制高校出身者の声 ミウラサユリ（静岡文化芸術大学国際文化学科2年）

##### 定時制高校で勉強した私

##### ○ 生まれは？

ほとんど自分の体験談で申し訳ないのですが、こちらの場を借りてあえてお話しさせていただきます。私自身の生まれは湖西市で両親の仕事の事情ですぐに浜松に越して来ました。兄1人妹1人で、兄はブラジルで大学へ進学して、今はブラジルで就職しているのですが、妹は日本の定時制高校を中退して今は就職しています。

## ○ 小学校

私自身は、幼少時期からずっとブラジル人学校に通って、途中で日本の学校に切り替わりました。小学校はブラジル人学校に通ったのですが、私は幼稚園もずっと通ってなくて、ブラジル人学校に通った時は、他の子に比べて母語でもポルトガル語での読み書きはできなかったの、学年を1つ下げて入学して勉強したわけなのですけども、いざ1年生で勉強して他の子と一緒にしようとした時には、経済的な理由、家庭の事情で退学しました。

その後は不就学になって、家の手伝いをしたり妹の面倒を見たりしていました。また小学校3年生でブラジル人学校に編入したのですが、そのブラジル人学校は ムンド・デ・アレグリアというのですが、編入する時は日本の学校みたいに年齢相当の学年に入るのではなくて、学力テストを受けてから自分の学力相当の学年に入ります。その時私は学力が乏しい為に小学校3年生で入学して、また小学校3年間ずっと勉強して、またすごく学費が高くて、教科書も直接ブラジルから来ているのですごく高くて、経済的な上でもまた退学してしまいました。

## ○ 中学校

その後すごく時間が空いて、日本の中学1年生という年齢まで13、14歳まで不就学を体験しました。その時は教科書があったのでやっていないところをやったり、家の手伝いをしたりポルトガル語の勉強をしたりしました。中学校1年生の時に浜松のカトリック教会で支援の教室があって、期間は9カ月と短いのですが、そちらでは私たちがブラジル人学校にもどってまた勉強するためのサポートを行っていた教室なののですが、私もブラジル人学校に戻ってまた勉強をするつもりだったので、他のブラジル人生徒と一緒にポルトガル語で授業を受けていました。

途中でずっとブラジル人学校で勉強すると、日本の進学資格がもらえないため、高校まで進まないといけなくて、それを知ってあわてて日本の学校に切り替わって、日本語での授業を少しやりました。

## ○ 中学校2年、初めての日本の学校

中学校2年生、13歳14歳で初めて日本の学校に変わったのですが、その時は佐鳴台中学校に編入しました。日本語は本当に少しでもコミュニケーションが取れる程度はできたのですが、授業についていけなくて、日本語は少しできていたというで先生が勘違いをされていて日本語ができるかなと思って取り出し授業も行わずに知らずにいるだけでした。

このままでは駄目だなと母も分かってくれて近所にある佐鳴台の近くにあったNPO法人アラッセ、それはブラジル人が経営しているNPOで外国人生徒の就学支援を行っていたので、放課後勉強を見てもらったり宿題を見てもらい、以降中学2年生から高校が終わるまでそちらで勉強しました。

## ○ 高校

高校は浜松大平台高校の定時制課程に入学しました。こちらを選んだ理由としては全日制に進む学力もなくて経済的な理由もあったので、働きながら勉強した方がいいのかなと自分で思っていました。定時制高校というとやっぱり夜間をイメージする方が多いと思うのですが、こちらの学校は朝と昼と夜の3つの部がありまして、私は朝の部で8時半から学校に行って12時まで勉強をして1日終わるという時間割でした。こちらの学校は単位制でもあって74単位を取得しなければ卒業できないという学校でしたので、多めに授業を取ったり部活もしてほぼ全日制と変わらないスケジュールを送っていました。アルバイトもして学費を稼いで授業と部活の両立もしていました。

私がここの大学に進学したいという時にサポート面では、外国籍で学年で唯一進学したいということもあって、担任の先生はどうしたらいいのか戸惑って、静岡文化芸術大学は英語推薦枠があるので、英語の成績が良かったので、部活の顧問の先生が英語の先生でもあったので、大学の過去問とか参考書とか下さいまして勉強を見てもらいました。あとはアラッセでも勉強しました。

## ○ 大学

今の大学を選んだのは、アラッセで中学から高校まで勉強したのですが、そちらで教えていた大学生がたまたまこちらの外国籍の学生であったことに感動して、外国籍でも大学進学は可能なのだと思ってここに通おうと思いました。先程も言いましたが、英語推薦枠で入学したのです。言語が好きで国際関係にも興味があってこちらの国際学科を選びました。

今では自分と同じ境遇の外国人学生とか高校生、小学生もそうですけれど力に少しでもなりたいと思って様々なボランティア活動をやらしていただいています。外国人でも大学に入れるというすごいことを聞いて励みになって、元々勉強が好きで高校進学と大学進学とをしたかったです。家は母子家庭で経済的に難しいかなと思ったのですが、奨学金の話聞いて、アラッセの先生からも情報をいただいて、奨学金は外国籍で断られるのかなと不安に思っていましたけれども、無事に通って今こうして勉強しています。

日本の学校に変わってからずっと唯一の勉強場所がアラッセで、日本人が経営している外国人の学習支援のものではなくて、同じブラジル人だったということで分かってくれるのが自分の学習事情とかを親身になって相談できたのがすごくサポートになって今の私につながっているのかなと思っています。短いですが、ありがとうございました。

**池上** いくつかの困難を複数抱えていながら学びたいという強い思いの元にここまで来れたと改めて感動して聞いていました。もう少し細かく聞きたい点があると思いますので、ここで休憩を取って、その後今日の話題提供者の皆さんに前に出ていただいてディスカッションをして行きたいと思います。

## 【5】 全体討論

それではこれから約1時間、12時半までの間でディスカッションをして行きたいと思います。今日は人数がもう少し少なければ、グループディスカッションで皆さんにお話しただいてから、こちらに話をふるのがいいかなと思ったのですが、今これから1時間フロアからいきたいと思います。

その前にパネリストの皆さんの中でこの方にこれを聞いておきたいというのがあればまず聞いておきたいと思うのです。とりわけ高橋先生から、今日は浜松の高校現場の状況であるとか、あるいは外国人当事者で定時制高校の生徒だったミウラさんの話を聞かれたと思うのですが、何かこれを聞いておきたいと思うのがあればマイクをお返しします。

高橋

ミウラサユリさんにお聞きします。ブラジル人学校に行っておられたということは、日本の生活の将来像とか設計は、日本へ来た段階でどういうイメージで最初来られたのですか。

ミウラ

両親がいずれブラジルに帰るという考えがあったので、それに向けて不自由がないようにブラジル人学校に入って、またブラジルに戻ってから勉強を続けるというような考えがありました。

高橋

今は日本語の話がとてもお上手ですが、ブラジル人学校に通っていらっしやるとポルトガル語も普通にお話しされると思うのですが、その辺の今後の将来像は、ポルトガル語と日本語、これから日本語をどういうふう勉強していった将来にどう活かそうかと思っておられるのかということをお聞きしたいです。

ミウラ

具体的に将来は全然イメージはできていないのですが、両方しゃべれるので両方を活かす仕事にはつきたいなと思っています。

池上

ちょっと口をはさむとミウラさんは英語もとても上手です。

高橋

ポルトガル語のスキルを上げる方法とか何かやっていますか。



ミウラ

母は日本語が全く喋れないので、家庭に戻れば本当にポルトガル語で、私も読書が好きでポルトガル語の本を読んでいます。

吉田

両方の言語ということで、小さい時保護者の母親の方はポルトガル語で話すでしょうけれども、日本語というのは基本的に小学校から少しずつやったのですか。もしくはその語学、日本語とポルトガル語は小さい時にどういう学びの時間があったのですか。

ミウラ

ブラジル人学校から少しずつやっていったのですけれども、本格的に日本語を理解するようになって喋れるようになったのは、中学校の終わり頃です。その時は本当にやらないといけないというのがあったのです。両方の言語を併用して勉強してきたのが、親とはもちろんポルトガル語でしゃべっていたのですけれども、本格的にポルトガル語は教科書を使って勉強してこなかったのですけれども、本当に喋って学ぶという環境が多かったですね。

吉田

抽象的な言葉はどうやって覚えるのですか。

ミウラ

抽象的な言葉だったり難しい言葉は辞書を調べて両親に聞いたり先生たちに聞いたりとかしていました。

吉田

その中で英語の推薦枠で合格されたということで、おっしゃっていたように英語ができるということですよね。3カ国語が同時展開で一緒におそらく中学校くらいから英語を勉強されたのでしょうかけれども、大学入試で合格するためには相当の努力がそこにあったと思うのです。英語と日本語とポルトガル語が1日中どこかでつきまとっているというところなんですけれども、受験に対して英語をやるということで英語の時間をいっぱい取っていたのでしょうか。

ミウラ

受験が近いということで英語をもちろん時間を設けて勉強したのですけれども、英語推薦枠の入試は英語だけではなく、日本語でも面接があるのでそちらの練習もしていました。でも主に英語に時間を設けてやりました。

池上

ありがとうございました。今の英語推薦の入試の枠について教員の立場で補足したいと思います。本学は、外国人枠を設けてはいません。先ほど来申し上げているように、1学

年 100 人定員の国際文化学科に数名外国につながる子たちが、今はコンスタントに入ってくるのですが、外国入枠というのはなくて、英語推薦入試と言っているものも、実は日本人の学生も受けるわけです。

ただ明らかに英語にアドバンテージを感じている子がそこを狙って来るということが言えます。小論文に相当するものを英語で書きますが、面接は英語だけの部屋、日本語だけの部屋と両方ありますので、英語しかできないと日本語だけの部屋でなかなか難しいということになっています。なお誤解のないように申し添えますが、本学に入学して来る外国につながる子どもたちは、センター入試、一般入試という枠でも入って来ますし、日本語だけで作文を書いたり面接をする通常の推薦入試でも入って来ます。

ただ英語推薦入試を設けたことで英語がアドバンテージになっているぞという外国籍の子たちはそこをねらって来るという傾向はあります。これについてはその入試枠の考案者である本学の広瀬教授から少しだけ趣旨の説明をもらいます。

## 広瀬

留学生用の試験ももちろんあります。ただしミウラさんのように日本に長く居た子たちに対しては対象外という訳です。

## 池上

私たちに浜松の公立大学としてどうやって外国につながる子どもたちを大学に受け入れるかと考えて本学の広瀬教授が知恵を絞ってくれた枠なのです。

それでは私からミウラさんに質問という形で補足説明してほしいことがあるので質問させて下さい。今日はミウラさん自身の学びに焦点をおいて話をしてくれましたのですが、一方で今大学に入ってからミウラさんは支援する側としても、とても活躍をしています。学習支援という点では浜松市教育委員会とうちの大学が連携しているステップアップ教室にも関わってくれているし、自分自身が学びの機会を得た NPO アラッセでも弟、妹たちの世代にも関わっている。これはポルトガル語を使って教えるのですか。

## ミウラ

日本語が分からない学生に対しては、ポルトガル語で教えたりしているのですが、本当に日本語を喋れる学生たちには日本語を使って教えています。

## 池上

高校進学を考えたいという外国につながる生徒たちに学習支援をする。必要に応じて自分が話せるポルトガル語などを併用しているということですね。

もう 1 つ今日のテーマである定時制高校ということで言うと、カラーズ (COLORS) という活動で今中心的な役割を果たしてくれています。カラーズは浜松の国際交流協会のサポートも全面的にいただきながら、外国籍の当事者の大学生たち、ほとんどが本学の学生なのですが、浜名高校定時制や磐田南高校定時制で、学習支援というよりもモチベーションの支援をするような活動をしています。そのカラーズの事も紹介していただけますか。

## ミウラ

カラーズは浜松国際交流協会が立ち上げた、外国にルーツを持つ若者のグループです。活動内容は本当にデマンド（先方の求めるもの）によって変わるのですけれども、今は外国籍の学生に対して、彼らが持っている疑問とか進学とか就職だとか将来を考える機会などを、ワークショップとかを交えて一緒に討論をしたりして考える機会を与えるような活動をやっています。

## 池上

カラーズは今、浜松の特色ある活動なので、少しここでカラーズに焦点を絞りましょう。今日は浜松国際交流協会のスタッフもお越しになって下さっていますし、磐田南高校の定時制からも小林先生がお越しになっていますので、少しずつ補足をしていただければと思います。

浜松国際交流協会から見たカラーズということで少し自己紹介も兼ねてお願いします。

## 鈴木

浜松国際交流協会の鈴木と申します。カラーズは2014年に立ち上がった外国にルーツを持つ若者のグループで、大学生が中心なのですけれども、大きなイベントで集まってそれで作られました。次に何をしたいかと聞いたところ、自分たちが中学生、高校生時代に苦労したこと、その身を持って経験したことについて、今の高校生の子たちに手助けできるような、就職とか進学とかについて当事者としての立場でアドバイスできるような活動をしたいという意向が本人たちから出てきたので、それを尊重してこちらでは、今浜名高校と磐田南高校で出張カラーズという事でワークショップなどを支援したりしています。彼らはアイディアもドンドン出てくるので、基本的に彼らのアイディアを支援する形でやっています。

## 池上

先ほどの高橋先生のお話の中で、慶応、上智大学の学生たちが入って支援をしているのですけれども、カラーズは主にブラジルにつながる当事者の学生たちで、フィリピンの方も若干参加しているということです。そういう外国にルーツを持つ、自分自身が同じバックグラウンドを持つ若者たちで、中にはミウラさんもそうですね、定時制の経験者も他にもいます。まだ始まって2年目ですが、活動の連携先も最初は浜名高校だけでしたが、今は磐田南高校にも広がっています。

## 小林

磐田南高校定時制の教頭の小林です。最初に浜名高校さんに去年カラーズをやっているという評判を聞きまして、磐田市の多文化共生社会推進協議会で池上先生もつながりがあるということで、是非本校にもということで来ていただきました。1年目ですが、生徒から非常に好評です。うちの学校は3割が外国籍なのですけれども、無目的で生活上

不安定な子だったのですが、最近では大学を目指したいと言い始めました。今日は担任も来ていますけれども、非常に好評です。来年もお願いしたいのですが、今度はやってきている活動が外国の子というだけではなくて、定時制の子全体に対して夢を持たせてくれるということで、抜き出しではなくて1年生全体にやってもらえないかなと考えているところで、我々教員が説教じみて何かキャリア教育するよりは、やはりお兄さんお姉さんの立場でというところがフィットして、母国人でそういうところが素晴らしいなと思いますので本当に期待しています。楽しみです。よろしくお願いします。

## 池上

自己顕示っぽく聞こえたらごめんなさいなのですがすけれど、なんで浜名高校とか磐田南高校とカラーズは繋がっていったのだろうということで、私自身がどう関わったのかという点をご紹介しますね。

私はずっと浜松市の外国人子ども支援協議会という市教育委員会の会長を仰せつかっています。そこに小・中・高の代表の先生方がお越しくださって、浜名高校の教頭先生がいらしていた。そこで本学の学生たち、外国人にルーツをもった非常に優秀な学生がいますと紹介したところ、浜名高校で活動が始まったわけです。

私は一方で磐田市の多文化共生社会推進協議会でも10年以上会長を務めていて、そこに磐田南高校定時制の先生が1名入っていらした。こうして、私自身がハブ、つなぎ役を多少は果たせたのかなというふうに思います。もちろん浜松国際交流協会がしっかりサポートして下さって今に至っています。カラーズという学生たちの団体は、大学の中で私が少しサポートして、大学の外では国際交流協会がサポートしている。こうしたサポートで学生たちがうまく浜名高校へ繋がったり磐田南高校へ繋がったりしたという印象を私は持っています。

そこは浜松のおそらくいいところだと思っています。本学の学生を大学の活動の中に囲い込まないで、ニーズがあって、そこに学生たちが関わりたいというのであれば、どんどん行きなさいというそんな流れにしてあります。

それではあと40分ありますので、高橋先生の最初のお話、吉田先生の調査報告、そしてミウラさんのプレゼンとその後の10分程時間を取って補足的な話をしましたけれど、どなた宛でも結構でございます。ご質問、コメントいかがでしょうか。

## 質問者

ミウラさんに質問です。奨学金の話が出ましたが、奨学金をはじめて知ったのは学校からだと思うのです。奨学金の説明とか特に本人というよりも親に、我々も伝えていくのが難しくて、通訳さんも来てくださっているのですが、特に保護者に対して書類を書いてもらう時になかなか伝えられない。途中で諦めて止めてしまうというのがあるので、そのあたりはどうやってクリアしていったのでしょうか。

## ミウラ

高校からまず話を聞いて、分からないところは先生に聞いて、それを親にこうこうこうだよと自分で説明して書いてもらったのですけれども、本当に自分から積極的に聞いて自分が親に訳したのがすごく大きかったです。

## 質問者

ありがとうございます。ミウラさん自身が非常に積極的で、動いたというところですね。なかなかそういう子が少なくて、押してやらないと動けない、でも押してやると学力あるからうまく進学できるのではないかという子がいるものですから、ちょっと課題に出したところです。

もう1つミウラさんにですけれども、大学を受けた時にアラッセにお世話になり続けた、そういう所があると、つまり義務教育を終えて高校生になっても面倒を見てくれる所があれば、また夢が広がっていくのではないのかな。

在学中でもやはり高校に入学できても静岡県の時制高校は学部数がそうなくて、工業さんも始めたのですけれども、入っては来れた後に途中でついていけなくなるということがありまして、そういう子も面倒見てもらう所、磐田ではないのかなと思うのですけれども、そこら辺をアラッセに通って来ている人たちの年齢構成とか、もう少し詳しく教えていただけますか。もしこの中にアラッセの関係者がいらっしゃったらお話を聞きたいのですけれども宜しくお願いします。

## ミウラ

年齢も様々で小学校就学前から18歳までが限界です。その間の様々な子たちが入って来ています。

## 質問者

ミウラさんのようなボランティアが教えているのですか。

## ミウラ

私は大学生でもたまに支援したりしますが、主に教室の先生方が教えているのです。

## 池上

アラッセはブラジルの方がメインにやっている団体です。その今のアラッセ代表の方の娘さんが本学デザイン学部を卒業して、在学中から妹、弟世代の学習支援に関わっていてその中にミウラさんがいた。そこでのブラジル人で大学へ進んだロールモデルとしての姿を見て、地元の公立大学ということで本学に焦点を絞って勉強してきた。ミウラさんが高校3年生の時だったと思うのですが、うちの大学でブラジルの子どもたちが集まるイベント、フェスタジュニーナを開催し、その時にアラッセの子たちを率いてやって来たミウラさんが写真に写っているのです。翌年、ミウラさんはうちの大学に入学しました。

浜松では、フィリピン人のコミュニティとしてフィリピンナガイサという団体がもう長く続いています。今日はそのナガイサの活動の中枢を担う松本さんがいらっしゃっているので、コメントでもいいし、あるいはフィリピン人コミュニティではこんな形で次の世代の学生支援や関与が始まっているなどの話があれば情報提供をお願いします。

## 松本

フィリピンナガイサの松本と申します。お話を聞いていてですが、ブラジルの方たちの現状というのがお父さんお母さんたちの世代から大分時間が経っていて、日本育ちのブラジル人の国籍の方というのにもいるとよく伺うことがあるのです。

フィリピンの場合は来日したばかりという世代がまだまだ多くて、こういう先行モデルがたくさん今は生まれて来てはいるのですけれども、それも外国人という風に一般化されて考えられてしまうと、つまり生徒がすごく多いのかなというのが、お話を伺って感じたことです。

ただ浜名高校でもカラーズさんが来てくれていて、彼らの中でも大学進学というのはすごく遠い話というふうに感じていたのですが、英語の勉強を頑張れば大学に行けるんだよという話を、私からもカラーズさんの話を聞いて伝えしていると、中にはやはり上を目指して頑張りたいなという生徒も生まれてきています。

各国の状況によって支援の仕方というか、こちらのスタートの地点が違うのかなとは思いますが、やはりゆくゆくは日本で生まれて、フィリピンのコミュニティの中で生活して、フィリピンではなくて日本の生活を選んでこれから生きて行こうという人たちが出て来るであろうと思うものですから、ブラジルの今回のミウラさんのようなケースがフィリピンの人たちにも伝えて行けたらなというふうに感じました。

## 池上

皆さんご存知のように今、フィリピンの子たちが小学校、中学校でも増えていて、学校現場ではフィリピンの子たちの課題というのが大きくクローズアップされている状況です。

そこで次にエリアで考えて見ましょう。浜松は市教委だとか、国際交流協会がサポートしています。隣の磐田だと多文化交流センターという所で、やはり本学の学生が学習支援に行ってそのロールモデルに接して、あっ大学に行けるんだと思ってうちの大学へ入って来た。そういう子がまた教えに行って循環が始まる。お隣の湖西も今日はたまたま国際交流協会の猪井さんがいらっしゃっていますので、学習支援の枠組みの中で小・中の次というのは湖西の状況はどんなふうですか。

## 猪井

湖西国際交流協会の猪井と申します。よろしく願いいたします。本当に今日ここに来ていただいているいろいろとお話を伺って、素晴らしい活動をされているなということをつくづく感じました。私自身この世界に入ってから日が短いのですけれども、試行錯誤というか本当に模索している状況です。

私どものところではちびっこ広場ということで、小学校、中学校に行っている子どもたちの日本語能力を支援したり、学習支援をしたりという活動をしています。これは市の委託事業としてやっているのですが、なかなか専門的に学んだ方たちがいないという課題があります。

小学校、中学校の先生を経験された方に1、2名入っていただいて、後はボランティアの方たちにサポートしていただいて、子どもたちの面倒を見ているのですが、1番の悩みが子どもたちのモチベーション、気持ちを上げるということです。そこに非常に苦労しています。

先程高橋先生のお話で両極端であるなど。最初の池上先生の話、上と下の両極端のバランスがそういった感じになっているということがありまして、やはりモチベーションを持ってやろうという子は上を目指して頑張っている。ところがそうではない子たちが、学習支援の場があるのですが、せっかくそこに来てその時間の中でただ来て喋っているだけという子たちがいる。ましてその場に入っても来ない子もいる。来るのですが、外で遊んでいるというような子がいます。手を差し伸べるのですが、自分でそこへ手を掴んで上がって来ようとしません。そこをどういうふうにつなげていけばいいのかなという悩みを持ちながら日々やっている、そんな状況です。すみません、自分の悩みだけを伝えてごめんなさい。

## 池上

ありがとうございました。今ちょっと浜松の状況についてお話ししたいところですが、高橋先生どうですか。神奈川のご見解など。

## 高橋

今湖西の方がおっしゃっていたことは、多分どこもそうだと思うのです。やはり子どもたちの気持ちを考えると、その子どもたちは基本的に多分途中で日本に来た子たちで、本人の判断ではなくて、本人が選択した訳ではなくて、親の都合で日本へ来たというところからスタートします。多分国へ帰りたいとか、そこから出発していると思うのです。いきなり学校で勉強しようという気持ちになるまでに相当の時間がかかるだろうなという風に思います。

その場に来るということはそこで何かつかみたいとか、つながりを持ちたいということだろうなと思います。神奈川は小学校、中学校対象の学習支援教室が大分増えて来て、私たちが最初に始めた20年前は5ヶ所か6ヶ所くらいしかなかったのですが、今は神奈川県内に100ヶ所くらい学習教室があります。横浜でいう国際交流協会が各区にラウンジというのを持っていますけれども、そのラウンジというのは最初は日本人の方に外国語を教える教室が中心だったのですが、今はどこも学習支援に入っています。

研修会をやったりして子どもたちの気持ちに寄り添って徐々に気持ちを向けていくところがやはりすごく大事で、当事者同志でつながりとか、それから若い大学生が寄り添うところとか、いろいろそれぞれある。前に私が教えていた学習教室はすごい年配の方がずっと横に付いて何もやらずに一生懸命社会の辞典調べて、その子はずっと一緒に調べて2人

だけの世界を作っているところがあって、その子は小学校の時はなかなか仲間の中は駄目なのですが、今はもう高校になるのです。神奈川県トップクラスの進学校に入っているラオス出身の子もいますので、本当にその子に合った人、場、仲間というのを彼らの気持ちに添ってやって行くことが大切ではないかなというおこがましいですが、気がします。

## 質問者

貴重なお話をありがとうございます。高橋先生、今のお話しの中で神奈川の件でいろいろな話を聞いたのですが、もっとも民営という立場から短い時間で結構ですので、今の神奈川の大きな活動の元になった ME-net。中心は高校の先生ですか。そこからもしよければ外国人支援が実は高校の先生方から始まったところを少しお話いただくと 1 つの示唆になると思っております。

## 高橋

簡単にお話しします。神奈川は他の所と違って大和市に定住センターがあって、そこが非常に重要な支援の拠点になっていた。今はないですけども大和の定住センターの所に集まっている日本語指導の方々の中にたまたま私も含めて 2、3 人、高校の先生がいたのです。地域で活動しているということで、大和定住センターで話し合った時にやはり難民の方で日本に来たけれどずっと言葉も使わず工場で働いていてやはり定時制に行きたいという声が上がって、じゃあということで相談を受けたのが 1 つのきっかけです。

その時にすごく日本語教室で頑張っていた年配の女性の方が 3 人いらしたのですけれども、その 3 人に私はお尻を叩かれるようにして、何とかしなければ駄目だと言われて、それで高校進学ガイダンスという、いわゆる高校に入るための説明会を 22 年前に、全国でそれははじめてだったのですけれどもやりました。どれくらいニーズがあるのかと思ったら全然関係のない四国から飛行機を使って来る外国につながる人がいたりしてびっくりしたのですけれども、その時にそういうくらいニーズがあるんだなと分かって、その時に組織を作ってやってきたというのが今の流れです。

たまたま神奈川が増田知事になった時に NPO と県が協働でやる、今回枠組みが基金 21 というのですけれども、それができて NPO 側が提案したものが採択されたら自動的に行政と一緒にやらなければならないということで、最初の頃は行政の人もやらざるを得ないかというふうにやっていました。

たまたまやっている中で我々教員もつながりがあるし、いろんな活動が広がってきて、通訳とかも入って、地域の支援者、通訳、高校の教員というのが組織のメンバーで、実際に活動している人だけで 200 人くらいいます。そういう方たちとのネットワークというのが少し認められて、今現在、高校の行政側も我々との信頼関係でその活動が広がっていて、高校は大体 25、6 校ですか。コーディネーターとかサポーターとか通訳とか、通訳は全県の制度ですので全県の高校から通訳依頼がかかってきたりするのでございますけれども、そうするとこちらで通訳を派遣する、予算は県が持つシステムになって、各高校で特に外国につながる子が多い学校には、いろんな形で学習支援とか日本語指導とか、講師になって入っている方もいらっしゃるから、そういうつながりがあるのです。去年から新たに定時制



がキャリア支援というのが始まったという流れになっています。だんだん広がって来たという感じですかね。

## 池上

静岡県浜松市はどちらかというと民間の方がぐっと前に出て、国際交流協会とか NPO とか大学とかが活動の中心です。神奈川のように、隣の愛知県の豊橋なども学校の先生方が NPO 活動の中核になっているのですね。そこは浜松の特色なのかも知れません。今のお話を伺っていると、吉田先生、教員の意識改革が大事だと最後は力説された立場で神奈川のお話を聞いてどんな示唆を得られたでしょうか。

## 吉田

私は高橋先生に質問はしなかったのですが、学校と社会をつなぐ教育委員会の方の協働事業でやられているというところなのではと思いますが、これをどういう訴えかけというか、教育委員会の方もそれを認めて助成金を出しているということですから、覚悟を決めていたと思うのですが、そのあたりの協働事業の背景といいますか、教育委員会がどのように賛同していったか、経緯みたいなものを教えていただければと思います。

## 高橋

今日的な課題だという認識があると思うのですね。先ほどのシートのプラットフォーム化というのは基金の時に審査員、審査員は第三者で、教育委員会は後から認めるというか認めざるを得ないところはあるのですが、我々との関係の中ではそういう事業をやりますよということで理解いただいています。

やはり 1 つは子どもたちにとって定時制高校というのは、高校から先のことをつなぐというところが中退してくる子がいたり、卒業後、今回のテーマは実は、就職弱者の若者の就労支援という課題だったのです。提案する側の求めたものはニートとか引きこもりとか、そういう人たちを如何に社会参加させるかみたいなイメージで提案募集したのですが、私たちはそういうところに行く前に学校の段階から支援しないと駄目だと思うのです。そこをすごく訴えたのです。

学校の段階から社会につながらないと彼らはその後、例えばよく若者サポートステーションとか、いろいろな相談機関が世の中にいっぱいありますけれど、彼ら自身が自分から本当に行くというのはよっぽど困った時です。よく若者サポートステーションの方に聞くのですが、あそこは 39 歳までなのでは、35 歳過ぎて 40 歳間近の人が来たりするのですが、それは何故かという、親も命がわずかでこの子は、このままの状態で親の資産である程度やり過ごしたとしてもこのままだと自分がいなくなったら、この子はどうするのだと本当に心配になって連れてくるというケースが結構あるらしいです。だからそこまで事態が重大になるということは、今の社会の大きな問題で実はそういう中に定時制出身の方も結構多い現実があるのです。

ですから私たちはやっぱり早い段階からその子どもたちは、そういう社会とつながって、働く経験もし、失敗するかも知れないけれどそれをまたセカンドチャンスをつかむよ

うな支援というものを継続してやらなければいけないと、すごくすごく思っていて、しかもそれは外国につながる割合が高いのです。

だから神奈川でいうと食品工業というのがあって、サンドウィッチを作ったり、コンビニの食品は大体朝届きますよね。誰が作っているのですか。外国の人が夜作っているわけですよ。それを日本人の人が当たり前で食べているのですけれど、そういう働き方しかできなくて、しかもそれがずっとそういう賃金で暮らさなければいけないという状態になり、工場の人たちがよくいうのですけれども、日本人のリーダーみたいな人に罵声を浴びせられたて、ちゃんと働けみたいなことを言われて、本当に心がズタズタになっている人たちが、ちゃんと働いているんだよとしないと社会としてどうかなと思うのです。そういうところはモチベーションで訴えるところです。

今回の事業で定時制が7校入っていますけれど、実は県だけではなくて市も横浜市と川崎市の高校が2つ入っています。一応県の教育委員会と協働していますけれども、視察に来てもらったり基本的に学校側と調整をさせていただいたりしながら、最初はすごく定時制の先生方も外部の人が入ることにごく抵抗があるので大変でした。そこはうまく教育委員会の人に理解してもらってつないでやって来て、この間もある学校で職員会議に呼ばれて私たちの事業の説明を先生方にして、これはこういう趣旨でと言ったら、先生方は、じゃあこういう人と学習支援、一般的な学習支援をしてくれるのか、そういう人ではないのか、いろんな提案があって新たなつながりができたのですけれども、そこまで行くのに1年かかりました。やっぱりそれくらい学校との連携は素晴らしいですけれども、まず枠組みがあって、やれるところからやると我々もやり易いのは確かにあるのかな。それはない所に入るのは相当大変なことだと思います。

## 池上

それを静岡県もやらないといけな。幸いなことに、今総合教育会議というのがありまして、静岡県は知事部局で「地域自立のための人づくり・学校づくり実践委員会」というのがあって私はその委員なのです。そこにいるイシカワ エウニセ教授は、なんと静岡県の教育委員を務めています。ブラジル人研究者としてとか、いろんな視点もあるけれど、静岡県の教育行政を担う教育委員の立場で今日話をどう聞きましたか。

## イシカワ

イシカワです。今日の在日外国人の教育の話を聞いて、問題指摘もありましたし、当事者ももちろんいまして、確かにその教育現場で議論されていても実際にどういう問題があるのかというのが非常に意見を集めていない部分があります。教育委員は教育支援と言いながら、吉田先生のご指摘がありましたように、親たちの労働条件が改善すると、そこそ子どもの教育というのがどうしても関係していますので、どういうふうにそれを考えていくのかというのが必要なのです。

まず1つずつ解決して行かなければいけないのかなというのが教育現場で定時制高校の中でもいろんなサポートがあると聞いて、これをちょっと題材に教育委員会の話題に出そうかなと思います。おそらくそういうのが話題に出ていないのだと思います。

今回私が何故教育委員になったのかと自分でも疑問に思っていたのですけれども、確かにそういう日本の常識としている、当たり前としている教育現場と違う部分が、皆が知っているけれど実際には本当の内容を理解していない、把握していない、子どもたちの状況を把握していないというところがあるのではないかと、そういう点では少しは貢献できるかなというのは思っています。

私も今までの研究の中では在日外国人、日本にいる親たちがきて日本で生活しているかというところから始まって、現在は子どもたちが外国人でいていいのかどうかというのを心から疑問に思います。先程のミウラさんのように日本生まれ日本育ちでおそらく日本で永住していく可能性が高い人たちが増えてきています。いつまでも外国人扱いしてもいいのかというところが疑問で、日本の社会の一員になるというのが目の前にありますので、どういうふうに教育委員会でも見ていくのか。私もすごく懸念しているのが外国籍だけではなくて、そういう不利な立場におかれている日本人の子どもたちも若者も多いので、そういう視点からもいろいろと意見を出すことができればいいのかなと思っています。

## 池上

もう少し時間がありますので、皆さん、フロアからご質問いかがですか。

## 質問者

ご質問させていただきたいのですが、先程ミウラさんの話の中で、親がいずれ国へ帰るだろうからということでポルトガル語の学校へ行っていたという話がありましたけれど、結局親の態度がはっきりしないと、ポルトガル語、日本語どちらに行かせるかありますし、多分定時制へ行っても進学させるのか就職させるのかと、親の意向は結構あると思うのです。

高橋先生のところでは保護者の方、高校生でも進路については、親の意向に係ってくると思うのですけれど、保護者の方への働きかけそういうものをされていらっしゃるのか。されているとしたらどんなことをなさっているのか、また吉田先生もそうなのですから、定時制に行っている保護者の方はどんな状況なのか少しお聞かせいただきたいと思います。

## 高橋

先程の話の中で神奈川は私どもの団体も含めて、最初高校の進学説明会というところで、高校に入った段階のところの説明会を是非1回やろうという事で集まったのですけれど、元々やはり教育相談を常態的に開くみたいなことを目指していたところがあって、ちょうど1995年にスタートして2003年に当団体は保護者も含めて、外国人教育相談を立ち上げて始めたというところで、いろいろな相談が入っています。

今現在は、教育相談は当団体が始めたのですけれど、今はアースプラザという横浜にある地球市民プラザという大きい組織で、そこも県とタイアップして教育相談をやっているのです。そこも本当に年間何百件という相談があって、定期的に私どもと相談のケース会議をやったりしていますので、その中で県全体として相談の受け入れについていろいろな相談をどうケアして行くかみたいなことをネットワークを含めてやっています。

今みたいな保護者の選択というのは、教育相談の場合あくまでつついこちはこう思うんだよということを言ってしまう相談員がいるのですけれども、あくまで最終的には選択でこちらが提示したものについて考えてもらうということなんです。ありがちなのは特に外国につながる親が多いので、子どもにまかせると言って、貴方の好きなようにやりなさいと言っておきながら、最後のどたんばでひっくり返すことが結構あるんです。お金がからんできたりとか、それはそうは思っていなかったと。直面すると途端に駄目だということがあるので、そこはそういう形になると子どもが傷つくことになるので、そういうところはなるべく保護者とやり取りして子どもの意見を交えながら、親が一方的ではなくて子どもの意見を交えながら、ただその場合こういうことが発生するよと説明しながら対応するのです。

## 池上

時間が早いのですが、ここで閉めていきたいかなと思っております。

高橋先生朝早くから遠い所にお越しいただいて、長年のご経験に基づくお話をありがとうございました。とりわけ、ごく直近の取り組みの事例を伺う中で、浜松あるいは静岡県も参考にできる点が多々ありましたし、大学でこのお話を聞いたこと意味を私自身とても重く受け止めたと思っています。

吉田先生には3年間のご研究の成果をご報告いただいて、やはり背景にある親たちの問題というものにも光を当てなければいけないと気づきました。昔から言われていてもやはりそこに意味があるなという気がしました。その一方で経済的な状況が改善されなければ何も変えられないのかという私たちは無力感に打ちひしがれてしまうわけですが、その中で今日の神奈川県のお話からヒントを得ることができました。是非形にして行きたいと思っています。

ミウラさんは今日ご自分の経験をお話しして下さって、場合によってはとてもプライバシーに関わることであったかなと、改めて思うのですが、それを乗り越えて今ミウラさんがここにいることの意味を今日集まった皆さん本当に深い感動を持って受け止めてくれたと思っています。さらに大事なことです、自分はこう頑張ってきたという話だけではなくて、次の世代に関わって学習支援やモチベーション支援にも活躍している、そういうミウラさんの姿に私たちは大きな希望を得ました。先ほどフィリピンナガイサの松本さんが、外国人と一言では括れないのだ、ブラジル、フィリピン、国によって事情はかなり違うのだ、ということをお話してくれました。それを聞いて、このフォーラムを続けていく中で、私たち大学も高校生のことを考えながら取り組んでいきたいなと改めて思いました。

この次は2月4日に第13回のフォーラムで、イスラムについて理解しようというテーマで、インドネシア人の方によるお話の機会を設けましたのでそちらも是非お越しいただければなと思っています。

それでは少し早い切り上げはございますが、高橋清樹先生、吉田正二先生、そしてミウラサユリさんに皆さんから今一度拍手をお願いします。ありがとうございました。

## 【趣旨説明 池上重弘(静岡文化芸術大学)】

### 文部科学省平成26年度調査より

(WEB資料参照)

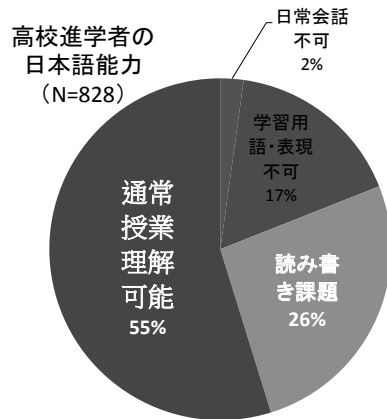
- 公立学校に在籍する外国人児童生徒のうち、日本語指導が必要な者は約2万9千人
  - － 小学校、中学校、高校、いずれも増加
    - 公立学校の外国人児童生徒数 73,289人の約40%に相当
    - 2012(平成24)年度調査から1,744人増加
  - － 言語別ではポルトガル語(29%)、中国語(22%)、フィリピン語(18%)、スペイン語(12%)の上位4言語で80%
- 日本国籍の児童生徒で、日本語指導が必要な者は7,897人
  - － 帰国児童生徒、重国籍、国際結婚。。。 1

## 浜松市教育委員会のデータ(2015年)から

- 日本生まれ、日本育ちが増加
  - － 2014年4月入学の小1は日本生まれが59%
  - － ブラジル、ペルー、ベトナムで日本生まれが多い
- フィリピン人の増加
  - － ここ10年ほどで急増
  - － ブラジル53%に次いで、フィリピンが13%
- 高校進学率は8割代、しかし定時制が多い
  - － 2014年度末の高校進学率は81.3%
  - － 公立全日制35%、公立定時制30%、私立14%  
(参考)2015年度の学校基本調査では全日制98%、定時制2% 2

## 外国人集住都市会議のデータ(2012年)から

出典:「外国人集住都市会議 東京2012 長野・岐阜・愛知ブロック資料」



- 全体の45%は日本語の理解に課題
- 全日制進学者(N=532)でも34%に課題
- 定時制進学者(N=220)では66%に課題

調査期間: 2012年5月1日～6月12日、

対象: 外国人集住都市会議参加都市(29市町)で公立中学校を2012年3月に卒業した外国人生徒

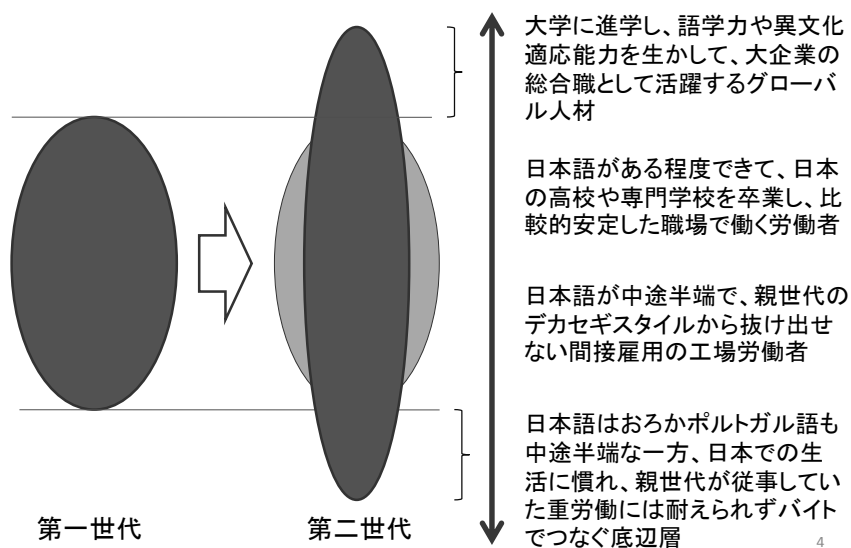
(ただし特別永住者を除き、「家庭内で日本語以外の言語を使用」または「日本語のネイティブスピーカーではない」ことを学校が把握している生徒。二重国籍や中国からの帰国生徒等、日本国籍を有する生徒も要件にあてはまれば対象とした)

回答者: 2011年度に外国人生徒を担当した教諭

有効回答数: 1010

3

## ブラジル人第二世代の格差拡大のモデル



4

## 第12回 多文化子ども教育フォーラム 定時制高校について考えよう

NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ 事務局長  
橋本高等学校（再任用）教諭 高橋 清樹

2016年11月12日(土)静岡文化芸術大学

### 1. 定時制高校ってどんなところ？

昔のイメージ	今のイメージ
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 働く人のための高校</li> <li>• 荒れた学校のイメージ？</li> <li>• 年齢が上の人も多い</li> <li>• 男子でやんちゃ系が多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 働く人のための高校？</li> <li>• 多様な課題を抱えた生徒が学ぶ場</li> <li>• 年齢が上的人是少ない</li> <li>• 女子も結構多い</li> </ul>

多様な課題とは  
→ほとんどの生徒がどれか1つ以上該当

不登校経験あり

学習が苦手

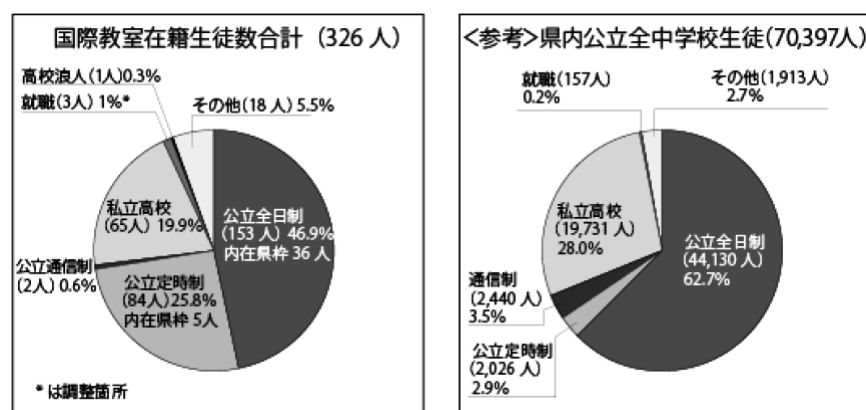
家庭状況が厳しい

LGBT

発達課題がある

外国につながりがある

## 神奈川県内の国際教室卒業生の進路状況



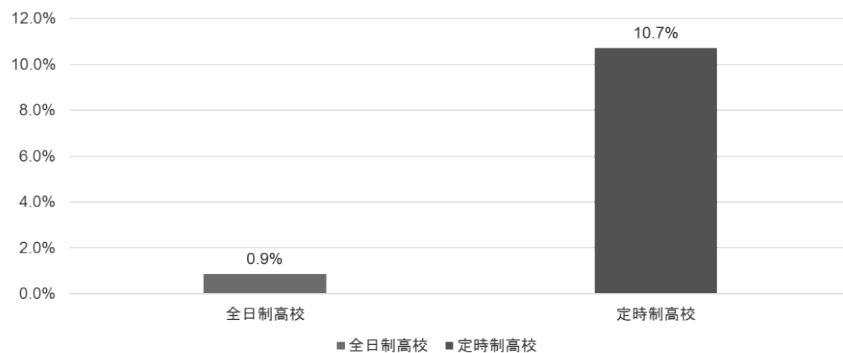
2016年(平成28年)3月の卒業生(回答率100%)  
かながわ国際交流財団作成資料



## 2. 定時制高校の抱えた課題

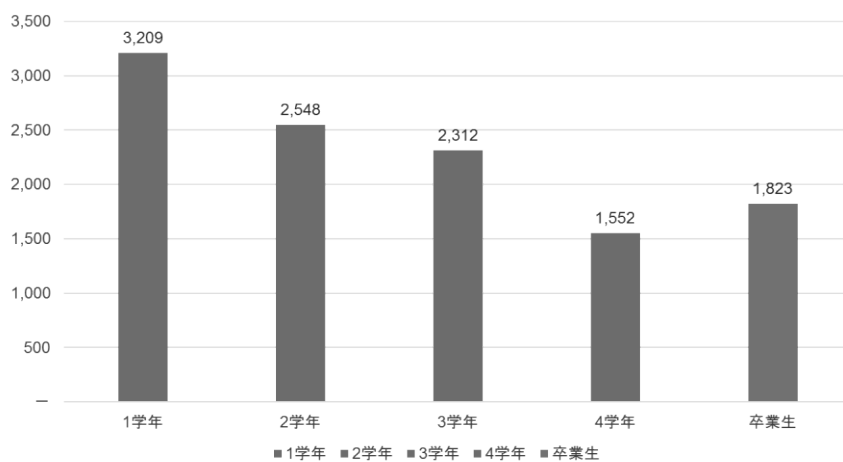
### 中退率の高さ

中退率(平成27年度の神奈川県公立定時制)



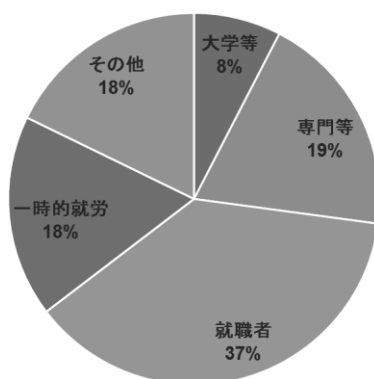
## 卒業に至る生徒の割合→57%

平成24年度の入学生の在籍推移(神奈川県公立定時制)



## 卒業後の進路

卒業後の進路(平成27年度神奈川県公立定時制卒業生1823名)



## 3. 定時制高校での支援の在り方

学校が楽しい居場所のなること

社会参加する気持ちを育てること

自分を守るためのキャリア支援

## 4. 神奈川での取り組み

「定時制高校でのキャリア支援事業」(2015年度～)

特徴

ME-netと県教育委員会  
の協働事業

定時制7校で実施  
支援内容は学校ごと

予算は神奈川県  
の助成金

A高校では・・・

校内カフェ



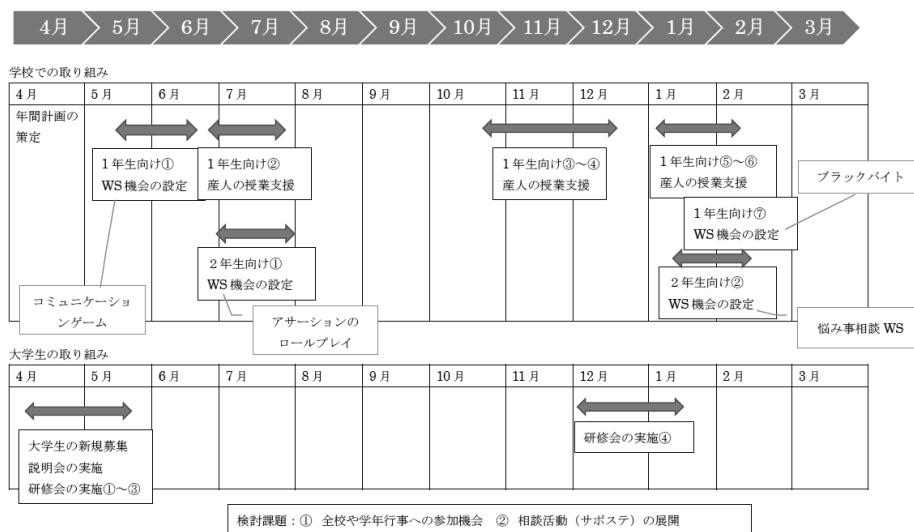
## B高校では...

# グループワーク授業



C高校では...

2016年度「キャリア支援事業の計画概案」(C 高校定時制)



## D高校では・・・

### 学習カフェ



## キャリア・就労相談の事例から・・・

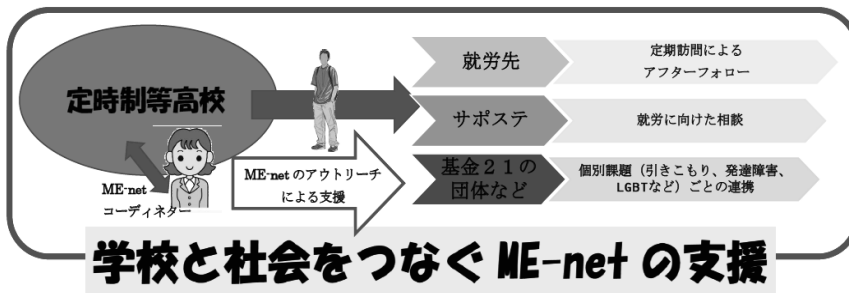
- ・主訴：卒業したら働かなければいけないので、在学中から少し慣れておいたほうがいいかもしれない。本音は働きたくない。
- ・相談経過：18歳で高校再入学。勉強苦手で学ばない。職歴はなし。働く上での不安はコミュニケーション練習や仕事を知るプログラムにも参加。
- ・相談ではアルバイトに向けて求人誌を見た。面接練習したり。コミュニケーション練習や仕事を知るプログラムにも参加。
- ・最初は仕事のイメージが全然わいていなかった。だんだん介護や警備の仕事に興味を持つようになった。来ていた介護の求人に応募し採用される。

**学校から外部  
の就労機関へ**

**就労へ**

## 私たちの目指すもの！

# 学校と社会組織のプラットフォーム化！！



ME-net だからできる「学校と社会組織のプラットフォーム化」

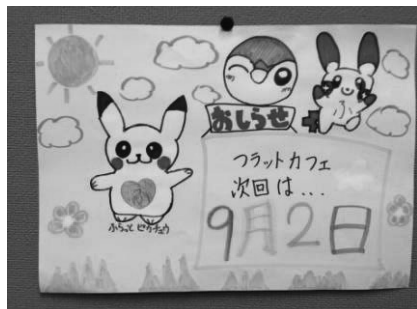
- ・高校との連携の実績（2007年4校→2016年25校コーディネータ派遣30名）
- ・団体内（理事及びコーディネーター）に様々なキャリアを有する者が多数（高校教員及び経験者9名、大学教員6名、社会福祉施設経験者1名など）
- ・様々な社会組織との連携（サポステ5団体、7大学、基金21の団体など支援組織多数）

プラットフォーム化のために・・・  
「学校と社会組織をつなぐ」  
ネットワークの構築

16



ご清聴ありがとうございました



# 多文化共生時代における教育の課題と提言

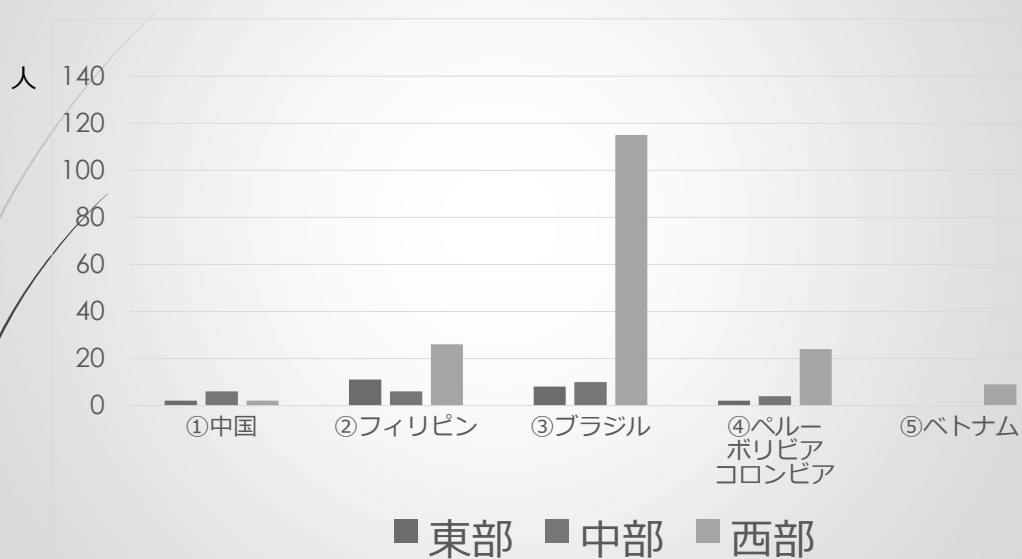
## － 一定時制課程における外国籍入学者の日本語能力をとおして－

－ 調査結果報告 －

静岡県立浜松工業高等学校

吉田 正二

### 県下定時制高校在学の外国籍生徒 (H26/May)

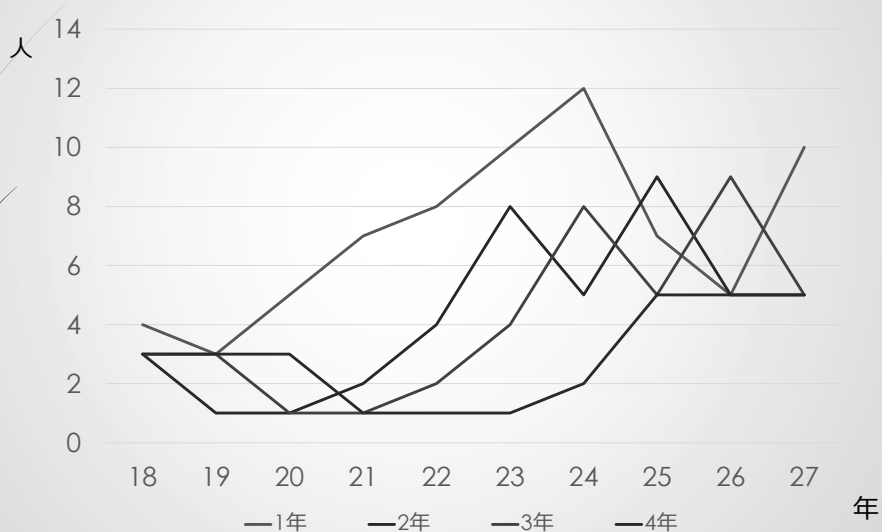


## 研究目的

外国にルーツを持つ高校入学者や在籍生徒の日本語能力に注目

- ◆ 1年目：現状把握－生徒・保護者へのアンケート調査
- ◆ 2年目：①生徒の家庭環境、保護者の教育観：インタビュー調査  
②母語教育と学力－学力調査
- ◆ 3年目：課題と提言（支援方法－教員の意識調査）

## 近年の外国籍生徒数の変移（学年別）





## 定時制課程在籍の生徒22人（H25/Oct.）

単位：人

学年	ブラジル	ペルー	ベトナム	フィリピン	合計
1	4	1	0	0	5
2	7	0	1	0	8
3	2	2	0	0	4
4	2	1	1	1	5
合計	15	4	2	1	22

## いじめ被害経験者数

単位：人

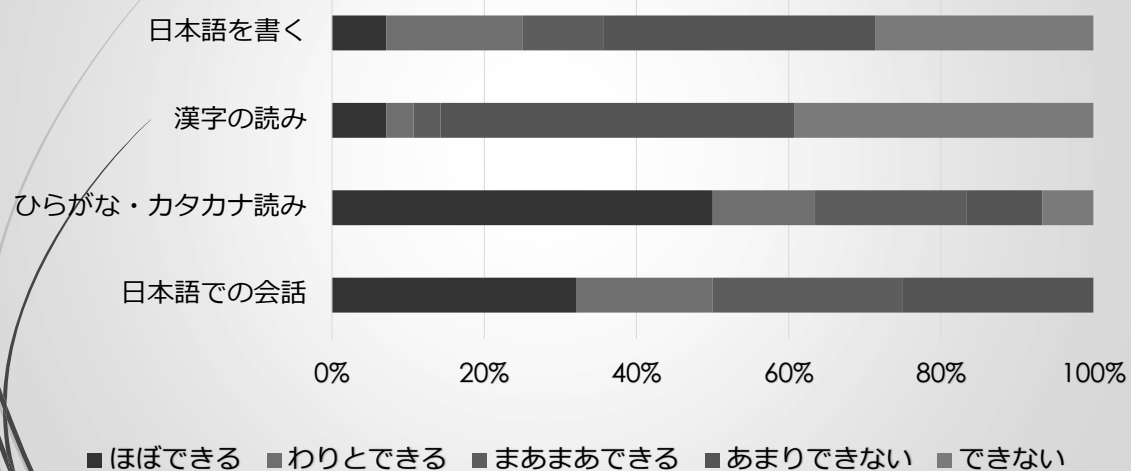
定時制（22）		全日制（12）		A高校 定時制（87）	
はい	5	はい	4	はい	27
いいえ	17	いいえ	8	いいえ	87
	29%		50%		30%

## 自分自身を日本人と比較した時の意識

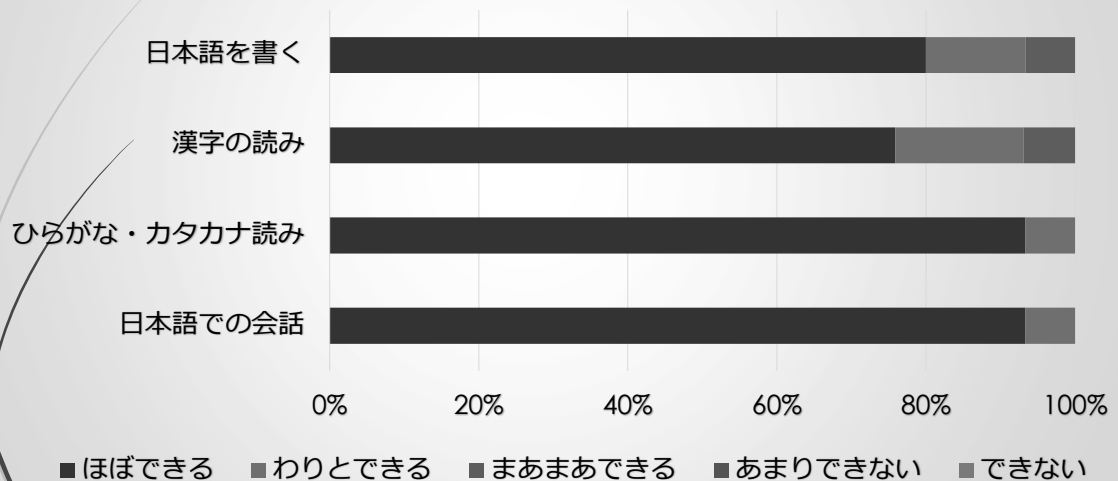
単位：人

	定時制 (22)	全日制 (12)	A高校 定時制 (87)
日本的	2	4	8
母国の人間	2	0	13
両国の感覚を持つ人間	10	4	44
特に意識していない	8	4	22

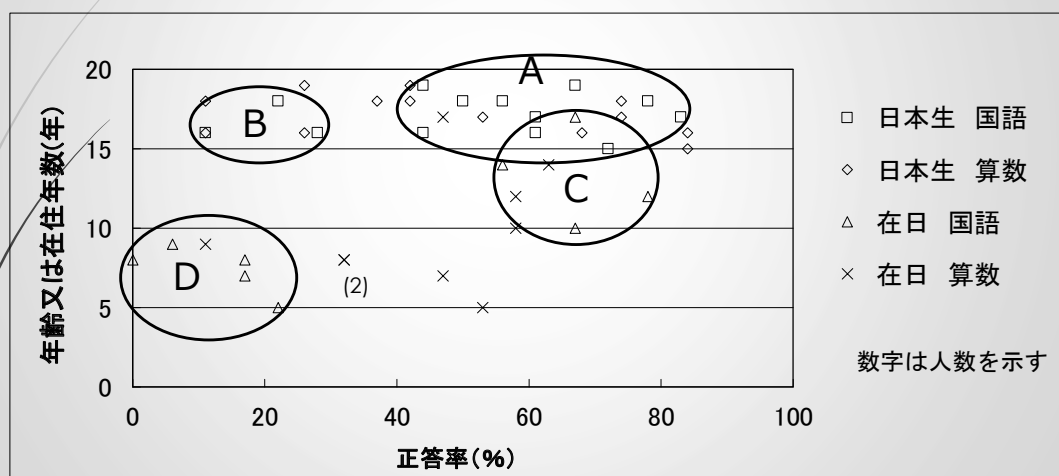
## 保護者自身の日本語能力



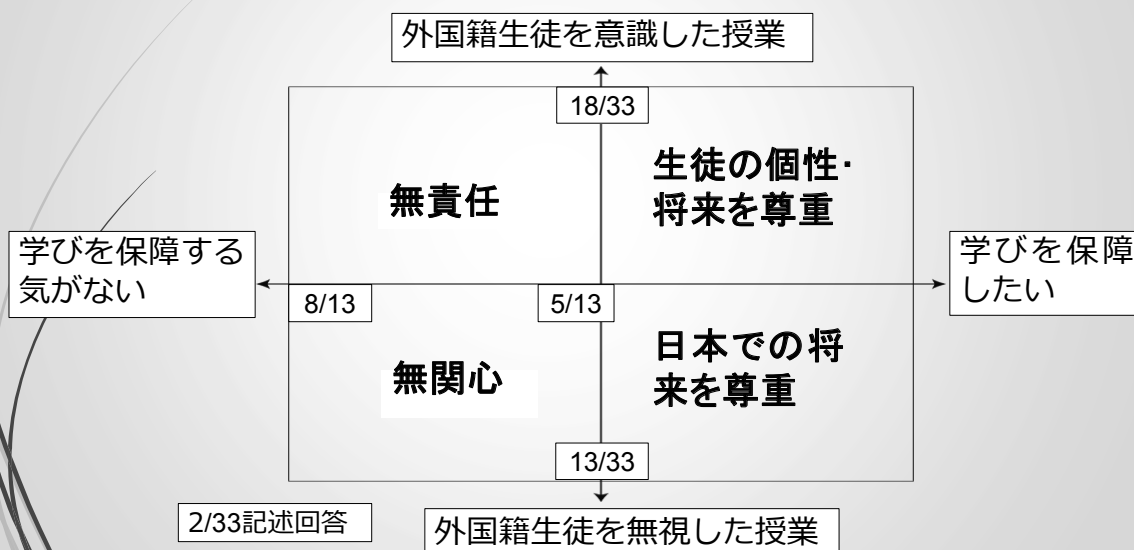
## 保護者が見た子供の日本語能力



## 日本在住期間と学力状況



## 教員の意識



## 支援体制づくり

### ◆教員の意識改革

- 教員研修
- 学習指導

### ◆心のケア

- 不安・ストレスの解消
- 母語指導

### ◆子どもをつなぐ支援ネットワークづくり

- 日本語支援
- 学習支援

# 定時制高校で勉強した私。

静岡文化芸術大学 国際文化学科2年 ミウラ サユリ

## 生まれは？

- 湖西市。すぐに浜松へ引っ越し
- 兄1人、妹1人
- 小学校はブラジル人学校へ通った

## 小学校

- ブラジル人学校へ通った

読み書きも出来なかったため、学年を1つ下げて、入学。その後、経済な理由で退学。  
その後、不就学。不就学時期は家の手伝いをしたり、妹の面倒見たりした。

## 小学校

- 学力が乏しいため、学年1つ下げて、小学校3年生で入学。

1年間勉強するが、また退学。その後、中学1年生まで不就学。  
学校で使っていた教科書でやっていないところを勉強したりした。

## 中学校

- 中学校1年生の時、浜松のカトリック教会の不就学支援教室に入学。  
ブラジル人学校に戻って、また勉強するつもりであったため、ポルトガル語で授業を受けた。  
途中で日本の学校に進学することを決め、日本語の授業に切り替わり。

## 中学校2年、初めての日本の学校

- 中学校2年で佐鳴台中学校へ編入。  
日本語は少しできたけれど、授業についていけなかった。取り出し授業も無かった。
- 放課後に勉強や宿題を見てもらう唯一の場所はブラジル人が代表の「NPO法人のアラッセ」。  
以降、そちらにずっと通った。

## 高校

- 大平台高校の定時制に入学。

多めに授業を履修し、3年で卒業。アルバイトで学費を稼いで、授業と部活の両立。

進学する学生は少ないから、担任の先生はどうしていいのか戸惑ってしまった。

アラッセでも勉強し、大学受験は英語の先生に見て頂いた。

## 大学

- 今の大学をどうやって選んだのか？

「アラッセ」で教えていた大学生が、この大学で勉強していたことに感動。

- 「英語推薦枠」で入学。

言語や国際関係に興味があり、国際文化学科を選んだ。

自分と同じ境遇の外国人学生の力になりたいからボランティア活動をしている。



## 終わりに

- 「外国人でも大学に入れる」ということを聞いて、励みになった。  
元々勉強が好きで、続きたかった。
- 母子家庭で進学が経済的に厳しい中、奨学金が可能にしてくれた。  
外国籍で断られたら、どうしよう…と思ったことも。それでも、母は「できるだけサポートはするよ」と。
- 唯一の勉強場所の「NPO法人アラッセ」は日本人が経営するものではなく、同じ「ブラジル人」だったことがサポートしてくれたことが今の私に繋がった。

## 趣旨説明 池上重弘



## 講演 高橋清樹



## 調査結果報告 吉田正二



## 定時制出身者の声 ミウラサユリ



## 全体討論



## 全体討論



## 第12回多文化子どもフォーラム「定時制高校について考えよう」

### アンケート自由記述から参加者の声

- ・定時制高校教員として、このようなテーマを取り上げていただきありがとうございます。
- ・これからやるべき事をしっかり考える機会となり、ヒントにもなりました。ありがとうございます。
- ・この場にいられてよかった。
- ・定時制高校出の大学生の関わりは、とても大きな意味があることを知りました。子どもの心に寄り添って共感してあげることができる存在が必要だと感じました。
- ・定時制の担当をしています。昨年まで定時制にいたので現状はよくわかっています。外国にルーツを持つ生徒、発達障害を持つ生徒など、社会的弱者になってしましそうな生徒が多数在籍しているのが定時制です。行政だけでは母体が大きすぎて逆に動きづらい部分もあるので、外部の機関での活動をアピールしていただき、行政と連携できるとありがたいと思っています。
- ・ミウラサユリさんに触発されて進学を目指す人が増えると思いました。これからも頑張ってください。
- ・参加して良かったです。静岡県が神奈川県よりも遅れていることがよくわかりました。
- ・行政として、高校進学を目指す子どもライフコースを踏まえて適時的な支援し挫折を味わった時のサポートなど考えていきたいと思いました。
- ・高橋さんのお話が大変興味深かったです。浜松では行政と HICE などは関係を持ててるが、それでは学生の連携は？と言われるとなかなか思いつかない。純日本人大学生にしかできない、外国にルーツを持つ大学生にはできないそんな学習支援の方法を見つけていきたい。
- ・定時制高校の現状がよく理解できました。神奈川県の実例は素晴らしい取り組みです。高校になると、日本語支援の手が少し離れてしまう傾向がある中どのような支援をしていけばいいのかということを考えさせられました。高校入学へのモチベーションを作り、維持していくことが重要だと思います。

- ・自分の将来に対する不安、日本で生きるのか、母国で生きていくのか彼らにどう対応したらよいのかわからない日々ですが、皆様も同じ悩みを抱いているのがよくわかりました。
- ・定時制高校の生徒に必要な支援や学校自体が欲している支援について外部ができることをもう少し深く知りたかった。
- ・学校の段階で社会とつながらなければならないという高橋先生の言葉が強く残りました。また、学校に通う生徒と社会（外部団体）さらに大学生らのロールモデルが出合う機会が生徒の将来の希望や支えになると感じました。ありがとうございました。
- ・どの発表者からのお話にも、刺激を受けた。私が取り組む小学校での学習支援にも改善すべきところが多いが、学校側、担任やクラスメートにも働きかけて帰られる点もあるのではと考えさせられた。
- ・定時制高校について考えるとといっても生徒、保護者、学校支援、教育委員会、就職支援、モチベーション工場、将来的展望の持たせ方、教員の指導など、考えさせられることが多いことに気づかされました。学校現場でできることをまずやっていきたいです。
- ・現在、高校の中退・不登校未然防止業務に関わる中で「家庭の意識」や「教員の意識」「居場所や仕組みづくりが大切だと思いました。引き続きご指導いただければと存じます。
- ・静岡県立藤枝高校の定時制で教員をしています。本校生徒の47名のうち5名が外国にルーツを持つ生徒で、やはり言語の問題、ブラックバイトの問題、経済的な問題を抱えています。日本語の学習支援を手探りでやっていますが、他行の実践や工夫等を共有する機会や県教委等の研修が充実していないと感じていました。そんな中で、本日のシンポジウムは大変参考になりました。本日の資料と学びを職場全体で共有して何かを考えていきたいです。
- ・神奈川県の高橋先生の報告が参考になりました。定時制高校そのもののあり方を仕組みとして見直すことが必要だと改めて確認しました。また、吉田先生の教員が変わらなくては！という熱い思いも素晴らしかったです。ミウラサユリさんも当事者として貴重な話でした。

- ・高校の問題は中学から続いている問題が多いのでは。中学からの支援がどうなっているのか、もっと切り込んでほしい。(今日のミウラさんからの報告では学内支援が充実しているようには思えなかった。)
- ・社会の多様化が進む中、ニューカマーへの対応は学校のみでは難しいのが現状です。「チーム学校」「社会に開かれた教育課程」が掲げられる中、多様なニューカマーの子どもたちを支えるのだなと感じました。
- ・静岡県内の事例や、神奈川県の実例を聞くことができ勉強になりました。様々な機関の連絡がカギになることは分かっているがなかなかうまくいかないところもありますが、「つなぐ」「つながる」をキーワードに取り組みを進めていけたらいいなと改めて思いました。

## 性別

	度数	%
男	15	57.7
女	11	42.3
合計	26	100

## 出身地

	度数	%
浜松市内	16	61.5
静岡県内	7	26.9
県外	3	11.5
合計	26	100

## 年齢

	度数	%
10代	1	3.8
20代	4	15.4
30代	3	11.5
40代	4	15.4
50代	8	30.8
60代以上	6	23.1
合計	26	100

## 所属

	度数	%
学校教員	7	26.9
支援員	3	11.5
ボランティア	3	11.5
研究者	0	0
行政関係者	4	15.4
学生	5	19.2
その他	3	11.5
複数回答（支援員・行政）	1	3.8
合計	26	100

## 参加回数

	度数	%
はじめて参加した	15	57.7
これまで1～2回参加した	6	23
これまで3～4回参加した	2	7.7
これまで5回以上参加した	3	11.5
合計	26	100

## 国籍

	度数	%
日本	25	96.2
無回答	1	3.8
合計		100

## 告知

	度数	%
文芸大HP	4	15.4
その他のHP	2	7.7
FICEのML	2	7.7
その他のML	2	7.7
チラシを見た	6	23.1
はままつ多文化MOBTHの 広報	2	7.7
複数回答	4	15.4
その他	4	15.4
合計	26	100



## 第12回 多文化子ども教育フォーラム (Forum on Intercultural Children's Education)



# 定時制高校 について考えよう

### ○プログラム

- ・趣旨説明 池上重弘（静岡文化芸術大学）
- ・講演 高橋清樹先生（NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ）
- ・調査結果報告 吉田正二先生（元静岡県立浜松工業高校定時制教諭）
- ・定時制高校出身者の声 ミウラサユリ（本学国際文化学科2年）
- ・グループ討論と全体討論

○主催 静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター

○後援 公益財団法人 浜松国際交流協会（HICE）

2016.11.12 (土)  
9:30～12:30

静岡文化芸術大学

南棟2階 南280中講義室  
浜松市中区中央2-1-1

お問い合わせ先

静岡文化芸術大学・池上重弘研究室

TEL/FAX 053-457-6156

E-mail ikegami@suac.ac.jp

多文化子ども教育フォーラム

検索

参加無料  
申込不要

外国につながる子どもたちの高校進学率はここ数年で少しずつですが着実に向上しています。しかし、外国人集住都市会議の調査(2012年)では、ほぼ半数が日本語での授業理解に課題を抱えています。

浜松市内でも外国人につながる子どもの3割近くが定時制高校に進学しており、定時制高校での学びを確かなものにするための対応策が求められています。

今回は神奈川県の高校教諭であり、NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ事務局長の高橋清樹先生をお招きし、神奈川での取り組みについて伺います。

また、浜松市内で実施された定時制高校の生徒や保護者等に対する調査結果の報告を受け、定時制高校を卒業して本学で学ぶブラジル人学生の声を聞きます。

このフォーラムは2016年度 静岡文化芸術大学教員特別研究「静岡文化芸術大学を核とした多文化共生の推進策をめぐる研究」(代表:池上重弘)及び「はままつ多文化共生MONTH」事業の一環です。

---

第12回多文化子ども教育フォーラム  
定時制高校について考えよう  
報告書

2017 年 3 月 印刷発行

編集  
池上重弘

発行 静岡文化芸術大学

430-8533 浜松市中区中央 2 丁目 1-1

TEL (053) 457-6156

FAX (053) 457-6156

Email: ikegami@suac.ac.jp

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社

433-8111 浜松市中区葵西 2 丁目 5-20

TEL (053) 436-1956

FAX (053) 437-6095

---